
微瞑むように 【第三話 少女貴族は野望を抱く】

ブシィ=ナスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微瞑むように 【第三話 少女貴族は野望を抱く】

【Nコード】

N2129B

【作者名】

ブシィ＝ナスカ

【あらすじ】

「この世界の裏側には、冥界があるんだよ。不思議な力を持った冥人達の幽玄の世界さ」ボケたばあちゃんの世迷い言だとばかり思ってたけど、なんか本当らしい。ついでに、決して交わる事の無い二つの世界の番人らしい。……村一番の、あの馬鹿が。一話完結型ライトファンタジー、第3話。

夏である。

寝苦しい夜を寝台の上でじたばたしながら越し、薄い雲に滲むような朝焼けを見るために窓の木戸を開ける。あちこちに飛んだ髪の毛を櫛で梳きながら、ガリーナは大きな欠伸をした。

「今日は雨が降りそうですね。奥様のための服飾講座、盛況しそうですね。」

ネグリジェを脱ぎ捨て、洋服だんすを開け放つと、色鮮やかな聖服がびつしりとぶら下がっているのが目に入る。丁寧に左が暖色、右に行くにつれて寒色の服に並べられていた。

聖女であるにも関わらず、ガリーナは一番左の純白と一番右の漆黒だけは着たことが無かった。正確には、取り敢えず作ってはいるものの、どういった時に着れば良いのか分からないのだ。誰かの葬式の時は黒に近い灰色を着る。だから両方の色の名前はまだ付けていない。

なんとなく両端の色を気にながら、真ん中辺りの服をいくつか引つ張ってみる。

「黒は私のお葬式の時で、白は けっ」

……真に使い道が無い。

一生着られる事も無いであろう可哀想な純白を眺めながら口を尖らせ、選んだ服に袖を通した。夏用の薄い生地と短い袖は心地が良い。同じ色のヴェールを被り、最後に大きく伸びをした。

「今日も一日、がんばろー！」

その時、彼女の声に返事をするように扉がかたりと音を立てた。思わず飛び上がり、「誰ですか？」と誰何するが、返事はない。気のせいだったのだろうか。静かに扉に近付き、そっと押し開け隙間から外を垣間見る。

最初に視界に入ったものに、ガリーナは目を丸くして声をあげた。

「まあ、貴方は！」

第三話 少女貴族は野望を抱く

カームは霧吹きを片手に、曇天を窓の向こうに眺めた。
雨が降るのか降らないのか、黒い雲の隙間から梯子のように太陽の光が地上に降り注いでいる。

丁度その近辺、暗い色の森の向こうに、小さな尖塔が覗いていた。
よくよく目を凝らしてみると、塔は鐘楼で、小振りの鐘が可愛らしくぶら下がっている。

一日三度鳴るはずのそれは、今朝は鳴らなかった。

「寝坊したのかな……」

鐘の守人である聖女ガリーナは普段から寝ぼけているような少女だが、生活では実に誠実なリズムを守っているはずだった。鐘を鳴らし忘れる事は、殆どと言って良いほど無い。

村人が彼女の鐘を基調に生活しているのもまた事実なのは、その勤勉さが無意識の内に信頼されているからなのだ。

（女子なんてどうでも良いじゃん。それより、僕らの新曲聴いてくれない？）

ぷしゅ、と窓から顔を離さずに霧吹きを自分の背後に噴きかける。
霧散する塩水に、霊はきやあと叫ぶと消えてしまった。

「風邪でもひいたのかな。鐘が無いと困るんだけどなあ」

（あのさあ、独り言なのそれ？ 聞いて欲しいなら聞いてあげるから、大声出しなつて。一人暮らしの辛さはよく解るよ）

ぷしゅ、と左隣にひと吹き。

もうすぐ昼だ。一日で二度目の鐘が鳴る時間だが、これも鳴らなければ様子を見に行かなくてはならない。

（はいはい、悪いのは僕らだよな。鐘が無きゃ困るもんね。早くあの女子の所に行ってみたら？）

ぷしゅ。

ぷしゅ。

ぷしゅ。

「心配だな……」

小さく呟き、カイルは窓に身を寄せた。

彼にとって、聖女は絶対に無くてはならない存在だ。彼女に大事があれば、彼もこの家で生きていけなくなる。ある意味で、カイルはガリーナに生かされていると言っても良い。

一刻ほど前からゴキブリのように湧いて出た霊の為に費やした人差し指の労力を思いながら、曇天に輝く石造りの尖塔を見つめた。

「拝啓……お元気……ですか……」

集会所に立てられた大きな日傘の下にうつ伏せに寝転がり、何かを書いているキリアは、時折手にした小さなメモ帳を見て眉を顰めている。昼休みということで、この避暑地で少年同様にごろごろしている大人達が数人いるので、キリアは彼らに向かって声をかけた。「なあ、陥穽ってどういう意味だっけ？」

「ああ、それはだな、筆筭の角に足の小指をぶつけるとなんか笑っちゃうだろ。あれのこと」

「なるほど。うーん、ちよつと使えないな」

頷きながらメモ帳にその意味を記しつつ、キリアは改めて別のページを捲った。メモ帳の表紙には「マル秘単語帳」と書かれていて、恐らくガリーナから借りた冒険小説で得た知らない単語を溜め込んでいるのだろう。意外と勉強家なところのある少年に本当の意味を教えようとも思ったが、隣で寝転んでいる青年　確か牛飼いの息子だ　のプライドを傷つけることになるのも面白くないので、カイルは黙っていることにした。

後ろに立つたカイルに気付き、キリアは首をひねって右手の羽根ペンを振った。黒インクが一滴、彼の頬にはねる。

「ミミへの手紙かい？ マメじゃないか」

「まあな。折角友達になったんだし、世の中大事なのはコネだからコネ」

唇を尖らせてそう言う少年は、余り素直な方ではない。気に入っていた女の子が王都に帰ってしまったことが寂しい、なんて口が裂けても言わないだろう。

「また遊びに来るだろうけどね。結局親父さんがお袋さんを連れて帰るのに失敗してるし、恐ろしい事にミミ自身も絶対に仲介人として成功させるまで引き下がらないって言ってたし」

「仲介って、誰と誰の？」

「決まってるだろ、ガリと……」

そこでキリアは口の中でもごもごと語尾を含ませ、誤魔化すように引き攣った笑みを浮かべた。カイルはその不自然極まりない筋肉の動きを眺めていたが、やがて手を叩いた。左手に握られた霧吹きが右手に当たってぺちんと鳴る。

「ガリーナ、そうだガリーナだよ。彼女を見なかった？ 朝から姿を見なくて困ってるんだ」

「じゃあ森の泉かな。午後からは奥様のための服飾講座とかがあるから、すぐ帰ってくるんじゃない」

霧吹きに変な目を向けつつ、少年は仰向けになって足を組んだ。

カイルはその言葉に少し失望し、キリアの隣に座って青い日傘の向こうの空を見上げる。

今日は曇天で日傘の意味は無いが、夏の蒸し暑さは相変わらずで、昼になると砂糖に群がる蟻のようにこの場所へやって来る人々の条件反射は侮れないものがあつた。村民館の隣のこの広場に　とは言っても何も無い村なので、広大な緑の広場の合間に家が立っているというのが正しい　林立された大きな傘は五つを数え、その下では村人達が布や寝椅子を引っ張り出して来て、昼寝をしたり本を

読んだりして暑さをしのぐ。

しかし、ただ日を避ける為なら家の中に居れば良い。

この避暑地が出来たのは、今年になってからののだ。

それというのも。

「おや、珍しい。ガリ殿がいらっしやいませんね」

陽炎の中、皺一つ無い黒服で身を包んだ執事が悠然と姿を現す。

右手には鍬を持ち、どこかの畑で労働に従事していたに見える割には服が全く汚れていないのが不思議だった。

「うん、昼寝にしてもいつもここで鼻提灯出してるはずんだけど。あいつ最近、絶対にヴェール取らなくなっちゃって暑さでふらふらしてるんだ。だからこれが大好きなんだけど、今日は来てないな」

キリアは寝転がったまま執事を見上げ、指先で隣に直立する巨大な氷塊を突付いた。

この執事が作り出した巨大な氷が、実に素晴らしい冷房機能を果たしているのだ。それだけでも、氷の冥魔術を使える執事を村の一員として迎え入れた価値があるというものだろう。

「足しましょうか？」

「いやあ、今日は猛暑でもないから十分だよ。ありがとな」

少年は心地よさにだらしなく口元を緩めてへらへらと羽根ペンを振る。黒インクが鼻の頭にはねた。

それを横目で一瞥して、カイムは膝の上で組んだ手元を見つめた。昼下がりになるとキリアとガリーナは毎日ここで宿題や編み物やをしに来る常連であるし、カイム自身も時折こうして何をするでもなく座ってぼんやりと空と蝉の声を眺めにやって来る。

ここにも来ていないとなると、一体聖女はどこにいるのだろうか。

このままでは、自宅が以前の頭の弱い幽霊屋敷に逆戻りしてしまう。小さく嘆息した時、執事が自分を見ていることに気付いて視線を上げた。

「カイムストーン殿、すっかりこの村に馴染んでいますね。アルプ様の元にいた貴方は、もっと無口で愛想も無かったと記憶してい

るのですが。明朗快活、大変結構」

カームは肩を竦めて相手を見上げた。肩に担いだ鍬と黒服と眼鏡に彩られた切れ長の瞳が似合っているのだからいいのだからよく分からない。

「その場に合った態度を取っているだけです。そういう貴方は全く変わりませんね。アルプー様の所へ帰らなくて良いんですか？ 貴方がいないと困るでしょう」

「困るでしょうね、権謀術数に長けた者がアルプー様の元にはわたくし以外にいません。隣の領のジスティアス様との確執もそろそろ表面化する頃合でしょう。困りましたな。ははは」

「……分かってるなら、何故」

「まあ、アルプー様が泣いて頼んでお給金を上げてくださるのならば帰って差し上げる事もやぶさかではありません。牧歌的な生活というものはそれほどまでに魅力的です」

多分もうすぐ泣いて頼んでお給金を上げてくるだろう、とカームは思った。あの男は大して器も大きくないし、政治にも強くないし、実は小心者だし、あるのは尊大さだけだ。それが妙なカリスマとなっているのは確かだが、優秀な参謀が傍にいないでは自滅するだろう。

「貴方も辞める事は無かつたろうに、それだけの實力がありながら」
心の底からそう思う。すると執事は真意の見えぬ笑顔を作った。
「もう飽きた」

カームは表情を凍らせた。隣のキリアも寝転んだまま啞然と口を開けて執事を見ている。

相手はそんな眼前の二人の様子を気に留めることもなく、「ところで」と今度は少年を見下ろした。

「ガリの聖女殿が服飾講座を開いていると仰いましたね。彼女は本当に裁縫が上手だと思いましたが、そのような事をなさっているのですか。一昨日見た赤いフレアスカートはその講座の為でしたか」

感心したように言う執事に、カームは気を取り直して不審げな視

線を送る。

「なんでそんな事を知ってるんですか？」

「いえ、先日彼女の家に泊まりましたから」

「……………は？」

キリアが開いた口を更に広げてかくんと大口を開けた。

事も無げに執事は続ける。

「なんでも良い布を手に入れる為のルートを知りたいとか。で、一晩中お話を」

「……………」

「いやいやああ見えてガリ殿、意外に寝首をかくタイプで……。おや、カイムスターン殿。面白い顔をなさって、どうしました？」

「いえ……………別に……………」

平静を保って呻くようにそう言ったカイムとは違い、キリアは硬直したまま変な声を出した。震える手で執事を指差し、

「お、お、おおお、お前、まままマジで？」

「大いにマジですが。それが何か」

しかし不思議そうな顔をする執事は、何か腹に一物抱えているのかどうかは判らない。ガリーナの家で一晩明かした事を打ち明けるのに何の後ろめたさも無い様子だった。

「ちよつ、お！？ 良いのかよ！ ていうか聖女だぞ聖女、あいつセージョなんだぞ！」

「うん聖女だ。巫女だと言ったら怒られた」

空に視線を飛ばしてそう返しながらも、カイムは動揺していた。

聖女は十秒以上男性に触れてはいけないという決まりがあり、ガリーナ自身もそれを頑なに守っている。彼女の知らない所で度々破られてはいるのだが。

それが、ついこの間村に来たばかりの見知らぬ男と一晩過ごすなんて、彼には到底信じられなかった。驚愕と共に、奇妙な憤懣が鎌首をもたげ始める。キリアが仰向けのまま腕を組んで挑戦的に執事を睨めつけた。寝転んでいるので膨らんだ鼻の穴が普段の倍以上見

えて、威厳も何も無い。

「ふ、ふーん。お前とガリがそんなに仲が良いなんて、知らなかったぞ。まあ、おれも昔はよく一緒に昼寝してたけどな、あいつと」

そして無理矢理口の端を上げて鼻から息を出す。競争心顕わに執事と火花を散らす少年は、掟がどうのというより単純に相手に負けた気がしているだけのだろう。

執事は焦燥的な態度になった二人を代わる代わる見遣ると、やがてにやりと唇を三日月形にした。

「ほう。ふむふむ。なるほどなるほど」

「な、何だよ」

「貴方がたは朋友どういはるという訳ですか、つまり」

「か、勝手に決めんなよ！ 誰があんな馬鹿ガリのことなんか、ばーかばーか」

ぱしりと二人の背後に雷が走る。カイムはまだ遠くを見ていた。

ファイがお玉を振り上げてこちらに走って来たのは、キリアと執事のぶつかる視線が臨界点を突破しかけた時だった。

「大変、大変よ！ ちょっとあんた達遊んでる場合じゃないよ、今とんでもないお客が来て」

「うるさい黙れ」

巨大な氷塊よりも冷たい一言にファイは汗だくのまま足を止め沈黙した。二名を除いたその場にいる全ての人間が、遠くを眺めたまま言葉を発した料理人の顔を慄いたように見守る。

正午が過ぎたのに鐘が鳴らない事に気付いたのは、誰もいなかった。

カイムは己の子供じみた態度に腹を立てていた。

ガリーナが掟を軽視して異性と一夜を共にしただけだ。年頃なのだから別に目くじらを立てる事も無いだろう。それが自分の元同僚、或いは元上司だとしても全く問題は無い。一月近く前に彼女が自分

に嫌われていると思ひ込んで必死に謝りに来た事だつて、彼女にとつては大した事でもなかったのだ。あの時に見せた涙さえ、些細な日常の一つだったのだ。

(……馬鹿馬鹿しい。子供か、俺は)

もうずっと昔に決めていたはずだ。

誰にも心を寄せず、誰にも期待を持たせず、一人で生きていくと。ガリーナと自分には、同じ村の人間以上の関係は一切無い。それだけは確実だ。だから執事に対して抱くこの醜い感情は、子供の幼稚な欲と全く変わらない。

全くもって、許せない程に愚かしい。

「これはこれは、貴方様自らこんな村にいらつしやるとは。ご連絡頂ければ歓迎会でも用意できましたのに」

だがしかし、ガリーナも軽率過ぎる。

あれ程カイルが触れるのを嫌がつていた癖に、執事となれば平気で家に上げるなんて。実際、彼は一度もガリーナの家に上がった事が無かった。

「我が主がどうしてもこの村を見に来たいと仰つてな。元々この土地はジスティアスのもの、別に不都合はあるまい」

別に用事が無いから家に行く必要は無い。だから良いのだけれども。

ああ見えてガリ殿、意外に寝首をかくタイプで……。

(つまりアレだ、彼女の前で隙を見せてはいけないということだ。

喉チョップでもするんだろう。恐ろしい子。……そう、鐘だ。鐘さえあればあとはどうでもいい)

彼女が恋愛したところで村が滅びる訳がない。あんな掟は、実質上ただのお飾りに過ぎないのだろう。

「料理人」

今の所、問題は鐘が鳴らされていないことだ。一度でもあの旋律が響かなければ、カイルの屋敷には鬱陶しい霊達が再び溢れ出そうとする。

「料理人」

そう言えば昼の鐘も鳴らなかった。
一体彼女はどこに行っているのだ。

「料理人!!」

はつと顔を上げる。

何時の間にか先導するファイに引き続きぞろぞろと歩き出した人々の中に、自分も紛れていたようだった。目の前は副村長マーブルの家で、村中の人間が集まっている。

人々の中心にあるのは、黒塗りの荘厳な馬車。御者や護衛兵が十人近くその周囲を囲んでいる。カームに声をかけたのは、馬車の前で冷や汗をかいているマーブルと対面している男だった。

「君は確か、アルプー様の屋敷の料理人ではなかったか？ 以前に一度、会食で見た気がする。我が主が大変に君を気に入っていたが

こんな所で何を？」

年の頃は二十代後半だろうか、黒い髪はカームと良く似ている。

眠たげな萌黄色の瞳に、彼は脳裏に閃くものがあつた。

つい今しがた話題に出たばかりだったので、驚愕を隠しきれない。「ジスティアス様のバトラー殿、ご無沙汰しています。私はアルプー様の厨房を退職して、今はこの村の料亭を手伝っています。

そこの、九里金豚と言う所ですけど」

ぐいぐいと脇腹を押してくるファイに応え、渋々宣伝する。本当はバーババ亭との掛け持ちなのだが。

「何？ あの豚領主の料理人が退職したの？」

馬車の中から鈴のような声がした。バトラーは鷹揚に振り返り、

「聞いた通りです」と返す。

「そうか、それなら」

さつと兵が扉を開ける。中から隣の領土の主ジスティアス本人が軽い足音を立てて地面に舞い降りる様を、誰もが口を開けて凝視した。

「益々、この村は私が手に入れなくてはならないな！」

羽飾りのついた男物の帽子。高貴な紅色の下地に金糸の刺繍の上着。黒いパンツに茶色のブーツ。

小麦色の肌に宝石のような青い瞳が、その服装に実に良く似合っている。

それは領主というには余りに幼く、そして同時に極めて気高い少年だった。

カイル以外の全ての村人が息を飲む音が聞こえた。領主のイメージとかけ離れた姿が現れた所為もあるだろうが、まるで箱庭で育てられたかのように小柄で細身の肢体に凜とした大きな瞳、小生意気に尊大な表情は余りにも都会的で、度肝を抜かれたのだ。領主ジスティアスは、まるでおとぎ話の世界から抜け出した幻想の住人のようだった。

ジスティアスは顎を上げ、啞然としている村人たちの質素な顔ぶれを端から眺めていたが、やがて鼻の辺りをむずむずさせ始める。

そして唐突に帽子に手をかけると、

「……う暑ッ！ やつてられるか馬鹿ッ！ バトラー、水水水、死ぬ！」

貴人にあるまじき乱暴さでべちんと地面に叩き付けた。肩にかかる銀色の美しい髪が解放され、僅かな風に靡いた。

もう一度村人が息を飲む。

カイルは確信した、今のは二度目の驚愕と同時に失望の合図だということ。

「お、女の子だったのか……おれ、てつきり」

「領主が女じゃ悪いか、子供。とにかくどこか涼しい所に入れろ！ 村の今後はそれから話す。それから料理人、何か用意しろ。ちゃんとデザートも付けてな」

マーブルはかくかく頷いてジスティアスの言葉を聞いていたが、その呼吸の切れ端におずおずと手を挙げた。

「すいません、その、つまり。この村は、アルプー様じゃなくてジスティアス様のものになると、そういう事ですか……？」

カイルは、唐突に湧いて出た話に驚いて少女のたるそうな表情を眺めた。箱入り育ちだったのだろう、初夏の暑さにさえ耐え切れないうだった。

「主はそう仰っている。とにかく早くお休み出来る場所を用意して頂きたい」

「あの、屋外で良ければすごく涼しい所がありますけど……」

ジスティアスは何度も頷き、控え目に前に出たキリアに促す。「それでいい。死にそうだ」

「ついでに、泊まる事の出来る宿はあるだろうか」

少女の隣のバトラーは相変わらず眠そうな目で居並ぶ兵たちを示し、その多人数に眉を顰めたマールブルは、暫く考えてからぽんと手を打った。

「あります。ちょっと古いですが、それでも宜しければ。な、カイル」

「は ええ？」

「ああ、構わん。感謝する」

カイルは少しの間手に持った霧吹きを見ながら考えていたが、やがて大きく頷いた。

「少し歌うかもしれませんが、構いませんか？」

この国は十二の州から成り立っている。

それぞれには一人の長が立ち、世襲制として家名を州の名とした貴族が治め、その貴族はそのまた上の王に仕えている。そこまでがキリアの知識の限界だった。

この村の属するのは、オルドラン州。ヘイムバスク・オルドラン・ノム・アルプーを領主とする、名の無いド田舎村だ。

村の隣を走る川を境とした向こうの州の名はたしかガレナ州だったから、この少女の名前はなんとか「ガレナ」「ノム」「ジスティアス」なのだろう。こんな辺境の、まさに州の境界にある村だから、どちらの州に属したとしても何の不思議も無いと思っていたので、領主が変わってもあまり驚きは無い。

帽子と上着とブーツを放り投げ、巨大な氷塊の隣の寝椅子に転がったジスティアスは、機嫌良く相好を崩した。小麦色の細い足首が顕わになり、キリアは思わず目を逸らす。

「子供、良い所があるじゃないか。なんでこんな所に氷があるのかわらないけど。なんか彫りたくなってきた」

はあ、とキリアは自分より少し年上であろう少女から少し離れて頭を掻く。彼女のすぐ隣ではバトラーが立膝で控えている。人々の目から解放され、二人はどこかくつろいだ顔を見せていた。領主様が休まれているから、ということと案内人のキリア以外の人間はそそくさとこの場から立ち去ってしまったのだ。つくづく胆の小さい村民性である。

尤も、ガレナ州の長を前にして、仕方ないと言えば仕方ないかもしれない。

「それで、お嬢、これからどうするんですか。こんな村に用は無いでしょう、適当に新たな主人として顔見せしたらとっとと帰りましょ」

バトラーは随分と横柄な口調だ。仮にも自分の主人にそんな言葉を使うとは　執事とは皆こんなものなのだろうか、とキリアは九里金豚から漂ってきた良い匂いを嗅ぎながら首をかしげる。

「んー、まだ。ガリの聖女に会う」

「……なんですって？」

「だから、ガリの聖女。知ってるだろ」

眠たげなバトラーの瞳が、一瞬鋭い光を浮かべた気がした。

しかしすぐにジスティアスを見下ろすと、「ところでお嬢、お話があるのですが」と言いつつ胸元から白い紙を取り出す。少女は横目でそれを見るなりあつと短く叫んで飛び上がった。

「一週間前の邸内試験の点数が六十台でしたね。どういう事ですか、お嬢？」

「お前私の寝室に入ったな！　折角ベッドの下に隠してたのに、何するんだ！」

それはこちらの台詞です、と相手は主の怒りを意にも介さず続ける。

「国民の二大義務を答えよ、その解答が『服を着ることとゴミを捨てることと仲良くすること』って何ですか。そもそも二大だと言ってるでしょう、何故三つもあるんですか。更に第五問、領内で殺人を犯した者の刑罰を答えよ、解答が『だいぶ怒られる』って当たり前でしょうがあんたアホですか。それとも馬鹿ですか」

「か、家庭内の問題を白昼の下堂々と暴露するなんてはしたないぞ！」

「はしたないのはこの回答です。領主とも思えぬ愚答、いやある意味面白い答案ですな。ご褒美に暫くお小遣い500エンス引きです」
そんなあ、と何時の間にか正座してバトラーの言葉を受けていたジスティアスが悲しげな声を上げて俯く。目にうつすらと涙を溜め、「いじわるだ」と呟くが、答案を再び仕舞いこんだバトラーは鼻を鳴らしたけだった。

その一部始終をしっかりと見てしまったキリアは、思わず「また

馬鹿が来た」と口に出しそうになって慌てて息を飲み込む。

一見すると麗しい男装の美少女とそれに追従する優雅な男だが、実は二人の力関係はまるで逆なのだ。

そして何よりも、馬鹿だ。

「それから先程の衆人環視の中でのあの態度、あれは何ですか。あんたは裏山の猪ですか？ 領主なら領主らしい態度というものがあるでしょう。恥をかきましたよ、私は」

「うううううう」

キリアは溜息をついて嫁と小姑のような二人に背を向ける。見ていない聞こえていない振りをするのはなかなか大変だ。

ジスティアスという少女は、領主にしては若すぎる。バトラーは彼女の教育係を兼ねているのだろうが、それにしても言葉の端々に冷たいものを感じてしまう。あれでは領主が可哀想だ。自分なら、多分悪態を吐きながら脛を蹴って逃げて夕飯までは帰らない。

そんな事より、問題なのは。

（アルプーのおっさんじゃなくて、このアホの子が領主になるのか……。究極の選択だなあ。ていうかもっとまともな奴はいないのかこの辺）

腕を組んで顰め面で暫く考え込む。

そして、可愛いからやっぱジスティアスで良いと結論が出た。同じアホなら駄目男の悪食よりも将来性のある美人の方が良いに決まってる。誰だってきつとそう言うに違いない。

とても良い笑顔で顔を上げた時、何時の間にか目の前に立っていた執事と目が合って大いに体を仰け反らせた。執事は少年の笑みを思い出し笑いだと思ったのか、眼鏡の奥から一瞥をくれただけでその脇をすり抜け、ジスティアス達の前に立った。

「あ、豚領主の」

正座したままジスティアスが上目遣いに執事を見ると、バトラーが立ち上がって執事に相対する。余り背の高くない執事の目は、丁度バトラーの顎にくる。

先に声をかけたのはバトラーの方だった。静かな語り口に、妙な挑発が垣間見える声音で、

「久しぶりだな、驚いたよ執事殿。アルプー様の元を遁走したと噂に聞いたが、まさかこんなところにいるとは……。出来の悪い主を持つと苦勞するものだ」

「偶には静かな所で額に汗して労働に従事するのも悪くないものです、バトラー殿。貴方のような悪趣味な方にはこの平々凡々とした良さは分らないでしょうが」

キリアは思わず黒服二人から離れるように一歩後退りをした。

（なんだ？ この殺気は……）

見える。見えない雷が二人の背後に見える。

透明の火花が空気を陽炎のように揺らし、夏だというのに汗一つかいていない二人の周囲を城壁のように囲っている。寝椅子に正座したジスティアスは、こんな二人の対面には慣れているのか、痺れてきた足をどうにかしようともじもじしている。

奇妙な殺気に戦慄したたった一人の少年キリアは、ごくりと喉を鳴らしてその一挙手一投足を見逃すまいと瞠目した。

沈黙の中、眠そうな黒髪のバトラーが、僅かに口の端を上げ再び口火を切る。

「その若さながら執事の中の執事と呼ばれた君が、落ちたものだ」

赤茶色の長い髪を後ろで一つに束ねた執事も同じく鷹揚に微笑む。

「ええ、そのわたくしから見れば貴方は邪道なのですが。赤薔薇白薔薇どちらの学校を出ている訳でもない、執事の家系でもない、眼鏡もかけていなければ白髪でもなく髭を生やしている訳でもない。全然駄目」

「ほう、それは牽制のつもりかね？ 懐剣を忍ばせているのは自分だけだとも？」

「まさか。しかし、最早わたくしはあのデブ様の執事ではない。喧伝されて余程困るのは貴方の方かと。まあ、わたくしが恐ろしいというのは理解できます。アルプー様の元から去った途端にこの

塩梅ですから、多少は優越感を感じても宜しいのでしょうか？」

「ふん、君がここにいと知っていたなら絶対に手出しはさせなかった。余計な手間が増えるからな」

バトラーは顎をしゃくつて、背後で顔を青くしてもじもじもじ体を揺らしているジスティアスを示した。「お嬢、良いですよ」と初めてそれに気付いた風に言くと、彼女は盛大に体を倒して必死に足を擦り始める。

キリアは二人の会話の断片から、どうやらこの村を二人の領主が水面下で取り合いをしていたらしいことを知る。それも、領主同士よりも、その執事たちが争いに大いに加担していたことが。

先程、執事が言っていた領主たちの確執とは、この村のことだったのではないか。

黙って執事を見上げるキリアに気付くと、相手は笑って頷いてみせた。その通りだ、という事だろう。

（ということは、だ。もしかしてこのジスティアスって子、勝手にこの村を自分のものと宣言しちゃったって事じゃないのか？ そんな事になったら、黙ってないぞ。あの小心者が）

脳裏に浮かぶ丸いシルエットに、キリアはかぶりを振る。春の厭な思い出が走馬灯のように乱舞し、鼻のあたりがひくついてきた。

「あのさ」

遂に耐え切れず、言葉を発してしまふ。三人の視線が一斉に集まり、キリアはえへんと咳払いをした。

「この村の人間として聞いておきたいんだ。今あんたたちがしている事は、要するに領地獲得の為の戦いってことなのか？ この村の主を決めるための」

違う、ここは私のものだ、と頬を膨らませた領主を無視し、執事はもう一度微笑を浮かべて頷く。

そして莊厳に言い放った。

「その通り。我々二人は主に代わり、長年に渡りこの村の争奪戦を繰り広げてきました。わたくしの脅し……手腕によりアルプー様の

物ということにはなっていました。が、わたくしが辞めた事によって両者の力のバランスが逆転しつつあるのです。そしてキリア殿、我々の名誉の為にも言うておきます。お互いが握っているお互いの弱み、それは主には全く関係がありません」

「無いのかよ！！」

思わず叫んだ。それまでの沈黙と緊張感に復讐するように、キリアは怒号を発した。

領地の取り合いを牽制し合っていた最後の砦、それは両執事の個人的なプライバシーの問題。

笑えない。笑えないというより、ありえない。

（しまった、忘れてた。皆まともじゃないんだった！ くそ！）

ぐしゃぐしゃと髪をかきまわす少年を尻目に、二人の執事は徐々にヒートアップする。笑顔は崩さず、体から立ち上る陽炎は炎のように燃え盛る。

「ええ、言いませんとも。実はバトラー殿が　趣味などとは！！」

「ああ、言わないとも。実は執事殿が　だつたなどとは！！」
その瞬間、キリアは遂に頭のネジが飛ぶ音を聞いた。

「お前らの喧嘩のネタにするなよこの村を！　うち帰って王国騎士団カードで対戦でもしてりゃいいだろ、貸してやるからさあ！　おれレアカードだって持つてるんだぜ、ほら！」

声を荒げてポケットに常備している遊戯用の王国騎士団カード略して王力ーを地面にぶちまけると、キリアは氷の後ろに駆けていつて、顔を膝に埋めた。

そして、少しだけ、泣いた。

ひんやりとした氷の冷気が心地よい。

どれくらいそうしていただろう、蝉の声に混じってしよりしよりと微かな音が存在していることに気付いたのは、もう涙もすっかり乾いた頃だった。

顔を上げると、執事達の会話を聞き飽きて暇そうにしていたジス

ティアスが、氷に手をかけているのが目に入る。間近で見る青い瞳は、空よりも深い美しい色彩を放っていた。

彼女が右手に持つのはノミ。

氷の向こうでまだ会話をしている執事達をちらちらと横目で見ながら、ジスティアスは「いいなあ、仲良いなあ」と見当違いな感想を口にする。

ぞりぞりと、氷をノミで削る手を休めることなく。

じつとりと少女を凝視するキリアは、眼前の巨大な氷が見事な程に華美な教会へと変容しつつあることに更に脱力した。上手すぎだろ！と叫んで氷に一撃を入れる事も出来たが、その気力が湧き上がらない。深い深い溜息は、きっとありもしない冥界の深遠にまで響いただろうと思う。

不適材不適所を地でいくような人間達である。ガリーナと共に生きてきたはずなのに、いや、共にいたからこそ、キリアは彼らの様な人種に対して過剰に反応せざるを得ない。

放って置けば一人ですぶずぶ底なし沼に沈んでいく。一人で地図も見ずに歩いて迷子になる。一人で思ったことをそのまま口にして逆鱗に触れて追い掛け回される。一人で食べられそうになる。一人で幽霊屋敷に行く。

だから誰かが止めねばならない。キリアが隣に立って頭を叩いて手を引いてやらなくてはならない。

こういう人種は一人では駄目なのだ。そして逆説的に、意外と寂しがり屋だったりするが、かと言って馬鹿と馬鹿が手を組めば馬鹿が二乗になって困る。水に水を足しても水だが、馬鹿に馬鹿を足せば生まれなくても良い無限の可能性が生まれてしまう。そんな小宇宙は発生以前に滅ぶべきだ。

だからキリアは平手を振るう。

今日も明日も明後日も、忌むべき希望を摘む為に。

戦え、キリア！ 村の未来は君が握っている！

「どっからお前の台詞だ　　！！」

殆ど発作的に言葉に魔力を乗せ冥魔術をぶつける。襲い掛かる数々の小隕石を華麗な足技で全て蹴落とすと、執事は満足げに頷いた。「ふむ、なかなか器用。強くなりましたな」

「ならざるを得ねえんだよ！ 気付けよ！ 頼むよ！」

眼窩から赤い涙を噴出させた調度その時、カイルとファイが料理の盛られた大皿を持ってやってきた。氷の異変に目を見張ったのはちよび髭の中年だけで、二人と面識のあるカイルは一瞥すらせずジスティアスの前に机を引っ張って来る。さっき避暑に来ていた老人達が王カーで遊んでいた、小さなテーブルだ。

「お口に合うかどうか」

言いながら、二人分の料理を少女の前に並べてゆく。ジスティアスはノミを放り投げ、それがバトラーの頬を掠って背後の木に突き立った事にも気付かず、心底嬉しそうにカイルの料理を見た。

「合つに決まつてる！ 私はお前のファンなんだから。なあ、うちの城に来ないか？ お前の作ったスープを毎朝飲みたい。良いよね、バトラー？」

「八十点で許可しましょう」

彼は無表情でノミを引き抜き、キリアに放る。少し困ったが、キリアは持つておくことにした。

「折角ですが、私はここに居るつもりですので……」

「なんだ、つまんない」

「ワタシ、ワタシ平気ね。毎朝愛情たっぷりスープを作つて差し上げるよ」

「そもそも八十なんて出るわけ無いじゃないか、馬鹿だなあバトラーは。あはは。そだ、光の成分についての新しい考察なら七十五点はいくかも」

「お嬢、そろそろ怒りますよ」

無視されたファイの上げた右腕は、引っ込みが付かずにぷらぷら揺れる。キリアは、美味しそうに自分の料理を口に放り込む少女から離れた所に控えたカイルが一瞬だけ執事を一瞥したのに気付いた。

いつもの困ったような、憂鬱な表情は先程から崩れていない。

（なんか、腹減ったな……。疲れちゃった）

キリアも彼に負けずにアンニユイな相貌でしゃがみ込む。暑いはずなのに、氷のせいで妙に寒気がした。

心配なのは村の未来と、それに付随する自分の未来。結局は権力者の手の内で転がされるしかない小村の運命に、苛立ちを覚える。

おいしーい！とジスティアスの歓喜の声とそれを嗜めるバトラーの台詞が聞こえた時だった。

遠くから微かな地鳴りが聞こえてきた。それは徐々に大きくなり、キリアがそれが馬の蹄の音だと気付いた時、疾走してきた一頭の白馬が轟音を上げてキリア達の前に急停止した。もうもうと舞う土埃に包まれた少女が咳をし、同時に料理が砂塗れで台無しになる。料理人の憎々しげな舌打ちが聞こえ、キリアは馬上の人間を見上げたと考えたのだ。料理関係でカイムの機嫌を損ねるとどういうことになるか、彼はちゃんと知っている。

白馬に乗っていたのは、整った顔立ちを怒りに歪めた三十代半ばごろの痩身の男性だった。水色の瞳はまっすぐに少女を捕らえ、

「貴様あ、ジスティアス！ この土地を誰の物だと思っている！

疾く去ね！」

馬上から一喝した。

「……………」

しかし誰もがその見知らぬ男性を一步引いて眺め、お互いの顔を見合わせてこそそこそと内緒話を始める。誰、知らない、可哀想な人などの単語が輪を作った領主と執事の四人組から発せられた。カイムは沈黙を保って男を睥睨している。

慌てたのは男だ。

「何を陰険な事を……戦争でも始めたいのか、小娘。バトラー、貴様が手綱を握っていないくて何とする！ さっさと帰って絵本でも読み聞かせてやれ、しっしっ」

「何だこの見知らぬ中年め！ 絵本なんか偶にしか読まないぞ、失礼な！」

「ほう、やはり読むのか、そうかそうか。何なら我が都で流行りの『守銭奴ころ助大冒険』でもプレゼントしてやろうか、ジスティアス嬢？」

「むきー！ 馬鹿にするな！ どうせくれるならぬいぐるみ付きでないで貰ってなどやらん！」

同レベルの良い諍いだ。

次の瞬間、害虫でも見るような目で手を振る男の態度に、キリアはふと思いついたものがあつた。

この器の小ささ、子供相手に本気になって声を荒げる大人げのなさ。

するとそれまで殺意をもって男を睨んでいたカイクが、ふと表情を凍らせて口を開いた。彼はキリアと同じことを、考えていた。

「……………もしかして、アルプー様、ですか？」

びく、と男は肩を震わせて青年を見下ろす。目には明らかな恐怖の色が宿っていた。

「カ、カイクスターンか。なんというか、その、まあこの間の件についてはもう怒っていないというか忘れてくれというか……………」

一呼吸置いて、カイクとキリアとジスティアスとバトラーと執事と釣られたファイの叫び声が曇天にこだました。

「何それ何それ何その異常な痩せ方！ あんた絶対どこかで毒盛られてるよ！」

「バトラー、怖いよう！ あいつ追っ払ってよう！」

「おお恐ろしい……きっと餓死した豚が化けているに違いありません。お嬢、早くこの村から逃げましょう」

「やっぱり遅かったか……冥人から獣化の呪いでも受けたか……」
キリアは半トーマスほど飛び上がって腰を抜き、ジスティアスとバトラーは寄り添って震え上がり、カイムは眉根を寄せて苦々しく呟く。ファイは周囲の人間の絶叫に恐れをなし、カナブンのような速さで逃走してしまった。

困惑したように馬上で沈黙しているのは、当の本人だった。くすんだ金髪を雨の匂いのする風に揺らし、無然とした表情と共に怯える人間たちを見下ろす目は空の色で、空想小説ばかりを読んでいる少女十人に「あなたの理想の領主像は？」と問えば九人が「この人です」答えるに違いない。

理想の領主は、やがて重々しく口を開いた。

「戦え、現実と。私はアルプー領主、オールドラン州の主であり、この村の主だ。確かに館が壊れた故の野宿が祟って心労ではんの少しだけ痩せたかもしれないが」

お前こそ現実を見るオというキリアの裏返った悲鳴を無視し、

「私は確かにアルプーだ」と断言する。

それでもまだ誰も信じなかった。ジスティアスに至っては恐怖の余りバトラーにしがみついて泣き出してしまっている。

「怖いよう……もう私、豚食べない。呪われたくない。怖いよう……」

「何を言いますか、お嬢。育ち盛りに豚は必須です。大丈夫、高名

な冥魔術遣い達を雇いましょう。豚の呪いを跳ね返す呪文を唱えてもらうのです」

「ぶつぶつ周囲で呪文を唱えられながら豚足を貪るの？　なんとなく魅力的だけど、ちょっとそれって不健全だとおもう」

「馬鹿おつしやい、退廃こそ貴族の特権です。耽美主義に走るのです。民草には発想すらできない贅沢を嫌がらせのように満喫してやるうではありませんか。豚足と言わず丸焼きでいきましょう」

「うん……。分かった。頑張る」

「よく仰いました。それでこそ、ガレナ州の主です」

「だから！　なんでガレナ州の領主である貴様がこの私の領地でのほほんと思春期における栄養価について語っているのかと聞いておるのだ！！」

二人きりの世界に入り浸っていた主従について頭の血管を切らせたアルプーが、馬から飛び降りて詰め寄る。既に恐怖から脱却したジスティアスは、足音高く闊歩してきたアルプーに胸を反らしながら偉そうに応えた。

「ふん、何度言えば分かるんだ元豚領主。ここは私の領土になるのだ！　だから私が主なの！　さつさと帰って家でも直してろ！」

「小娘が、それは王国憲章統治の章第三条一項を網膜に残像が焼きつくまで眺めての台詞だろうな？　『領土における統治の移譲に関しては、各領主が双方の合意に基づいて為すものとす』！　貴様がぞろぞろと部下達を引き連れてここにやって来たという伝令を聞いて来たと思えば、この有様だ」

ジスティアスは尊大に顎を上げたまま、バトラーを振り向いた。

「どういう意味？」

言葉を拾ったのは部下ではなく、激昂しているアルプーだった。「つまり、勝手に人様の土地を自分のものにしちゃうと駄目ってことだ。バトラー、貴様一体この子供に何を教えてきた？　こんなのが領主だと、ガレナ州の民草も苦勞するわ！」

少女はその言葉に口を曲げ、再びバトラーを振り返る。アルプー

の言葉に一片の隙も見出せなかったのだろう。彼女が縋る目で従者を見上げると、バトラーは相変わらず眠そうな目を擦りながら低い声で言った。

「しかし、実はその条文には罰則規定が御座いませんで。やっちゃ駄目だけど、やっちゃっても別に王様からは罰は無いよという、まあ形骸化した法です」

「おい、貴様……」

アルプーは据わった目でバトラーを睨みつける。

「知っているはずだ。罰則規定が無い故に、結局領土の取り合いを始めた領主達は必ず戦争を起こすと。私は何があっても戦争だけは絶対にしない。だから大人しく手を引けと言っているのだ」

この国では、過去に何度も領土盗りの合戦が行われてきた。特にまだ王の権威が強大でなかった中世に於いては、冥魔術も駆使した血で血を洗う戦争が何十年も続いたこともある。現在は落ち着いたものの、戦争となる火種はそこかしこに存在するのだ。特に、この村のように、領地の境界線付近の場所では。

その時、黙って動向を見つめていたキリアが、呻くように呟く。

「すげえ。おっさんが領主に見える」

「気付くのが遅いぞ、小僧」

春の思い出がトラウマになっているのはキリアだけではなく、アルプーも同じくそうであった。少年に特に、少年の背後で未だ不審げな顔をしているカイクに目を合わせないように返事をする、引き攣った目許で目下の敵であるジスティアスとバトラーを睨めつける。

ジスティアスは、初めて困惑したように柳眉を下げた。

「戦争なんて、私も考えていないぞ。戦いなんて嫌いだ」

「そうだろう？ ジスティアス、ならば話は簡単ではないか。いたずらに私の領土に手を出す事はやめろ。平和を保つ為には、努力が必要なのだ」

珍しく優しい声音で 慣れない行為のためか、引き攣った目許

がさらに痙攣していたが　宿めるアルプーに、ジスティアスは微笑んだ。花が咲いたように無邪気に輝く笑顔で、大きく頷く。

「うん、でもここは私の土地だつて決めたから！」

ぶちん、とこめかみの血管が破れた。

「こおおんのクソ餓鬼がア　！！　オラ来い！　割つてやる！　いつぺん中身垂れ流しにしてやる！！」

瞬間、例の如く大人にあるまじき心の狭さで少女に掴みかかったアルプーの体が、真横に吹っ飛ぶ。背後から彼の頭に回し蹴りを叩き込んだのは、沈黙を守っていた執事だった。

「落ち着きなさいアルプー様、それじゃ代理戦争にもならぬ頂上決戦です。クライマックスはもう少し引き伸ばすのが常套でしょう」

細く長い脚で宙を振り切ると、大地に伏臥した男の頭を踏みつける。その流麗な動き全てが様になっていた。

その時、完全な部外者と化してしまったキリアは、吸い込まれるように執事の姿に魅入っていた。そしてふと後ろに立つカイムに目を遣る。最近村にやってきた人間として、執事とカイムは自然と比較の対象となるのだが、二人は余りに正反対だった。執事は都会的で冷たい美しさのある人間で、カイムはどこか朴訥とした不思議な人間だ。同じ職場で働いていた元主従の関係であるというのも興味深い。二人がガリーナと仲が良いのもまた、興味深い。

（……あれ？　なんか）

ふと眉をひそめる。

何か。　何か、妙な気分になった。

まるで心に小さな棘がひっかかったような。

「し、執事ッ！　貴様、主に対してなんたる無礼な！」

盛大に鼻血を吹きながらがばつと起臥したアルプーの裏返った声に、キリアの思考は中断する。

（まあ、いいか）

そんなことよりも、今のこの状況の方が大事だ。……大事なのだが、そろそろ面倒臭くなってきたのが本音だ。さっさと決着を付け

て貰えないだろうか。

「主？ 何のことでしょう」

執事が片足を宙に揺らせたまま言う。

「領主アルプー様は自己管理も出来ない無能でした。優秀な主に優秀な執事は必要ありません、優秀なその才覚を存分に生かして一人での二三倍働けばよろしい。無能な小物に付いてこそ、優秀な執事は輝くのです。わたくしの主、太った油じみた情けない小男アルプー様は死にました」

たかが痩せただけでこの言い様である。アルプーは実に情けない表情で血を出し続ける鼻を抑えつつ、執事を凝視した。そんな元主からさつさと目を逸らし、執事は先程キリアがばら撒いた王力ーを拾い集め始めたバトラーを手伝う。

領主は暫くそのしゃがみ込んだ後姿を捨てられた子犬のような目で見つめていたが、鼻血が止まると、気を取り直したように強い視線でジスティアスを振り向いた。

「とにかくだ！ ガリの聖女とこの村は、このアルプーのものだ！」

「違う、ジスティアスのものだからな！」

「何を言うか小娘が。今更のその妄言、聞き捨てならん。この村は私のものだ！」

「だって私最初から認めてないもん、この村がお前のものだなんてそんなの私が生まれる前の話だろ！」

「あのなあ、玩具の取り合いじゃないんだぞ！ めいぐるみ付き「守銭奴ころ助大冒険」をくれてやるからお家にお帰り！」

少女と中年は火花を散らし、同時に叫んだ。「執事^{バトラー}ッ！」

「何ですか。それより貴女、そういえば昨日また買い食いしてましたね。お小遣い下げますよ」

「わたくしは貴方の執事ではなく、皆の執事です。ひとつのラブより沢山のライクです。世界に一つだけの珍花よりも花粉と酸素を撒き散らす常緑樹、そんなものをわたくしは愛す」

呼ばれた二人は、拾い集めた王力ーから目を離さずに淡々と応え

る。彼らは地面に座り込んでゲームを始めてしまっている。キリアも試合の動向を眺める為、近くに寄って観戦をしていた。余りに長く不毛な言い争いの輪廻に、すっかり飽きてしまったのだ。矢張り喧嘩は小気味良い啖呵と切り返しの応酬をしつつ、少しずつ前進しなければ聴衆の興味を惹き続けることは出来ない。子供の言い争い程度のレベルでは、特にキリアなどの百戦錬磨の人間にはちっとも面白くないのだ。

二人の主はそのつれない様子に声を失い、情けない表情で部下を眺めた。今更ながら口喧嘩の技術を磨かなかった事が悔やまれる。常に注目を浴びなければ気が済まない貴族の二人にとって、今の状況は実に悲しいものだったのだ。

そして次にやるせない視線の行く先を探し、一人輪から離れて佇んでいたカймを見つける。

「カймスターン、絶対ここは私の土地だよな」

「カймスターン、誰がなんと言おうと私の土地だな」

一人はやや明後日の方向を眺めていたが、二人の視線を同時に受け、カймは腕を組んだ。眉根を寄せて領主達を眺め、やがて重い口を開く。

「……それで、アルプー様のその痩せ方の秘密は何ですか？」

「お前、マイペースにも程があるぞッ!!」

二人の領主の怒号にも、カードを見つめた三人が振り返ることはなかった。

カームは雨雲をじつと眺めて熟考していたが、ふと瞳に光を閃かせて二人に視線を向けた。さつとアルプーが顔を逸らす、無視して続ける。

「どっちかが死ぬまで殴りあうとかどうでしょう？」

滅茶苦茶である。

「……前から思っていたが、お前、たまに人としてアレな事を言うな」

「『いい事を思いついたぞ』って顔して言わないでくれ……拒否するのがちよつと躊躇われるだろ」

思い切り顎の引けた二人を見て、カームは聊か気分を害した。いい事を思いついたぞも何も、これ以外に万事解決する方法など無いだろうに。結局世の中の根幹は弱肉強食なのだ。まさか三角図の頂点付近に佇んでいる人間達が、そのようなことを知らないはずもない。自ら手を下す勇氣さえ持たぬ主に、下の者が果たして行くだろうか？

そんな彼の不満げな表情にますます顔を青くしたアルプーとジスティアスは、気まずい沈黙と共に地面を見つめる。では、とカームは代替案を提案した。

「代理戦争ということで、お互いの執事殿が死ぬまで殴り合いを」

「出来ればその血に濡れた発想から脱却して貰えまいか」

「お願いしますお兄ちゃん」

深々と頭を下げられ、カームはついに溜息を吐いた。

「じゃあもう勝手にすれば。お宅らはどっちもどっちなんですから。俺は知りませんからね」

どっちもどっち。

誰もが思っていてそれでいて敢えて言わなかった事を、この料理人はあっさりと、それでいて気だるげなお母さんのごとき口調で言

つてのけた。キリアはカードの動向を眺めながら、しっかりとサムアップでその偉業を称えた。

そもそも、とキリアの視線の先で、カードを場に捨てながら執事が小さな声で呟く。「代理戦争なんて事になる前にアルプー様を刺して逃げますから」

対面するバトラーは山から伏せられたカードを取りながら小さく返す。「まったく魔性の執事だよ。私なら鼻薬をきかせるね、君に」キリアはこくこくと頷く。少年は、既に彼らの性格を完全に把握していた。もう何も驚き畏れることなど無い。

そんな部下達のやりとりも知らず、しかも何故か村民であるカイムに怒られてしまった気がする領主達は、しゅんとした様子で行き詰った喧嘩の行方をどうすべきか模索していた。しかし、お互いの主張をお互いが譲らず、暴力無しに解決する方法など、どうにも思いつかない。ここで折れれば家名に泥を塗るとまで考えてしまっているのだ。流石にとつちもどつちな領主たちでも、その程度の冷静さと誇りは持っている。

ふと、ジスティアスが蒼い瞳を天に向け、小さく口を開けた。そして「そうだ」と呟く。

「……選挙だ」

「選挙？」

訝しげな表情で少女を見下ろし、アルプーは眉を顰める。選挙などという言葉は、王都の聖教会の坊主達がまれに使うシステムを指すもので、それ以外の人間にとっては全く身近でないものだった。貴族貧民に関わらず。

ジスティアスは大きく頷くと、大きな瞳に相手の中年を映す。

「発想を逆転させるのだ。領主が民を選ぶのではなく、民が領主を選ぶ。この村の、十五歳以上の自己決定能力のある成人した男女に私と貴様のどちらがより領主に相応しいのか、選んで貰おうではないか。ただし即物的な煽りも賄賂も駄目だ。例えばお金をあげるから私を選ぶ、とかは禁止。自分が領主になったらどのような政治的

メリットがこの村にあるか、演説を中心にジェントルに民草に訴えるのだ。どう？」

アルプーは気難しげにまじまじとジスティアスを眺めていたが、やがて不敵な笑みを唇の端に浮かべ、頷く。

「ほう、斬新な試みだな。面白い、受けて立とう！」

今この瞬間、世界初の民主政治が生まれたのはさて置き、その様子を眺めていたカイムは「へえ」と感心して独り言ちる。「死ぬまで殴る必要が無くなるんですね。回りくどいが、良いアイデアです」
冷や汗を流しながら、ありがとう、と返す二人を遠目に、執事達三人はカードを次々と場に流して行った。主達には聞こえない低い声音で、手元から視線を外さず言葉を交わす。

その様子は、如何に部下である彼らが軸となつて領土の奪取について牽制しあつていたかが垣間見える、含蓄のある物言いだつた。

「また奇妙な事を。領主が民におもねるような事をしても良いんでしょうかね」

「さあな。だが、面白い発想だ」

最後の一枚を投げ出すと、バトラーは立ち上がる。そして顎で中年と少女を指し示し、静かに宣言した。

「勝敗の決着はこつちに移行だ、執事殿。どちらの領主がより上手か、勝負しようではないか」

「どちらの執事が、でしょう」

にやりと笑うと、執事は眼鏡を押し上げてカードを捨てる。それから立ち上がつて相手を見ると、バトラーより一回り背が低いはずが、不思議と対等の視線を交わしているような気迫があつた。

「どちらの領主が有能かなど、わたくしから見れば一目瞭然です。全く、甘いんですから。貴方達は本当に面白い」

「そうかね？ 私から見れば、君らの方が不思議だがな」

お互いに笑みを浮かべ言葉を交わしながら、二人はそれぞれの領主の下へと戻つて行った。その会話の意味を理解することの出来なかつたキリアは、ばら撒かれた自分のカードの後始末をしながら少

しだけつられて笑ってしまふ。勝負事が嫌いな少年などこの世に居ない。面白くなってきた、やはり喧嘩はこうでなくてはならない。体の血がゆっくりと温かくなってゆくのを、地べたに座り込んだまま感じていた。

一方、この場にいるもう一人の村民であるカームは、相変わらずどうしても良さげな表情で砂塗れになってしまった料理に視線を置いている。昼食を台無しにしたアルプーを叱責する機会を失ったのが残念だったのだ。

「さて、」とアルプーの隣についた執事がジスティアスとその後ろに控えたバトラーを見つめながら宣言した。

「わたくしは一度退職した身。今一度かつての主の下に出戻るのは執事としては感心出来るものではございません。それは恥です。ですからわたくしは、よっぽどの事が無い限り！ そのような恥を甘んじて受け入れるつもりはございません！」

「分かった、分かった。給料を一割増にするから」

アルプーの情けない声に、執事は黙って静寂を保つ。やがて二トームス吐き（注釈：トームスおじさんが二回深呼吸するのにかかる時間）した頃、びしりとジスティアスの後ろのバトラーに人差し指を突きつけた。

「さあ、準備なさい！」

「良いだろう。頼んだぞ、料理人」
「やっぱりこっちに振られるか。」

面倒だったので、カームは伝令を使うことにした。その場で目を伏せ、しばらくそのまま雨雲を運ぶ風の音を聞く。微かな耳鳴りが聞こえたところ、聞き覚えのあるあの忌まわしいボーイソプラノが風に乗ってやって来た。

『何、呼んだ？ 自棄っぱち系』

目を上げると、例の美少年合障団の団員が一人、宙に浮いている。キラキラと輝く赤い派手な服を着ていたので、丁度披露していたところだったのだろう。死の舞踊を。

カームは曖昧に頷くと、腕を組んで少年霊を見上げた。

「領主を決める選挙をするらしいから、副村長にそう伝えてくれ。一刻で準備をするように」

「……で、そうする事で僕らにどんなメリットがあるのさ。さつきから館に変な兵士達がいつぱいやって来て、彼らの接待に忙しいんだよ。両A面新曲が十枚ほど溜まってから、全部披露するのさえ夕方までかかるんだよ？」

少年は大仰に溜息をつく、宙でくるりと一回転し、頭の上で腕を組むアオリのポーズをする。カームは一瞬、相手を冥魔術で吹き消すイメージを脳裏に浮かべたが、そんなことはおくびにも出さず続けた。

「どうせ副村長は選挙にかこつた祭にするだろ。こっちでリサイタルでもやったら？ ガリーナが鐘を鳴らすまでの間だけだな」

少年霊は少し黙ったが、やがてくすくすと笑みをこぼす。白魚のような手でカームの髪を撫でると、風に乗って来た道を翻ってゆく。『オッケー！ こりや凄いや、数十年ぶりのフェスティバルだ！

シニアも動員して、生きてる奴らを死ぬほど虜にしちゃうぞーるるららーらー』

生死の境を彷徨うだろうな、何人かは。しかし、リサイタルが始まる前にガリーナを見つければ問題ない。馬鹿と鉄は使い様である。

この場合、馬鹿というのがガリーナと幽霊のどちらを指しているのか、カーム自身にも分かりかねたが。

ふと首を巡らせると、その場に居た全員が凍ったようにカームを凝視していた。紙のように白い顔で、幽霊屋敷を僅かながらでも知っている執事だけは平然としていたが、驚愕とも恐怖ともつかぬ表情をしているので、カームは困ったように笑ってみせる。

「今の、俺の従兄弟の友達の息子の級友です」

誰一人信じなかった。

信じなかったが、それ以上の追求を避けた。

何故カームの従兄弟の友達の息子の級友が半透明なのとか、宙

に浮かんでいたのかとか、突然現れたのかとか、生きてる奴らをどうのとはどういう事かとか、聞きたい事は沢山あったに違いない。けれど、どういう答えが返ってきてても安堵は得られそうにないことは、カイムの何時ものように優しげな笑顔を見ていれば自ずと解るものだ。本能というものは誰にでも存在するのだから。

「冥獣召喚士だ……」

啞然としながらも目を輝かせたジスティアスを、バトラーが面倒臭そうな瞳で見下ろしたのが視界の隅に映る。カイムは踵を返してその場を後にした。ガリーナ探索の続きをするためだ。

少年霊が、たまたまガリーナの鐘の「封」が遅れた為に現れていることの説明はするつもりはない。あんなのと友達だと思われるのが不本意だったからだ、既にそれは手遅れだということに気付くことも無かった。

カイムの予測通り、副村長は選挙を祭に昇華させるつもりらしい。女性は炊き出しに走り回り、若衆は屋台や舞台を急いでこしらえ、隣町に花火を買いに馬まで走らせる。先程の休憩所では楽団倶楽部の老人達がこの地方に伝わる古い楽器の手入れに余念が無いし、外に居ない者は蚤の市に出す商品を家中引つ繰り返して探している。ふと大通りを見ると、大きな垂れ幕が派手な旗と共に風に揺れている。 「第一回領主決定選挙祭」とやたらと丸い字で書いてある。

第二回以降があるかどうかは分からない。カイムがこの村に来てから何度か祭をやったが、いつも「第一回大工の嫁双子出産祝い祭」や「第一回台風の目が村に滞在祭」や「第一回太陽が眩しかったから祭」などばかりなので、常に第一回を冠詞として使うのが慣例なのだろう。第一回台風の目が村に滞在祭は、その名の通り台風の目が村の真上で風が凪いだ時に行ったのだが、当然数時間で台風の目は移動する訳で、大風に煽られながらも何故か皆楽しそうだった。ガリーナなどはキリアと一緒になつてぴょんぴょん飛び跳ね、風の

せいでいつもより遠くに飛べます素敵ですとかなんとか言っていた。そんなに好きならいつでも台風を起こしてやるのに。

そついう言葉が喉まで出掛かって、カイムは慌てて引き攣った笑顔を浮かべたものだ。

ともかく、この村の祭好きは異常である。若者は強制参加なのだ。当然、カイムもまた。

「ガリーナを探しに行くって言ったのに……」

溜息混じりに言いながら、金槌を板に叩きつける。元々手先は器用なので、彼の作る屋台は他のものよりもこぎれいに出来上がりつつあった。当の領主たち本人は、控え室で舞台が出来上がるまで出番を待っている。何の出番だか知らないが。

「子供じゃあるまいし、放つといても出てくるよ。なんでそんなに会いたいんだよ？」

少し離れた木陰に座ったキリアが、さっきから握っているノミを弄びながら尋ねてくる。カイムが手を差し出すと、持っていた釘を投げて寄越した。

「説明すれば長くなるけどね、寺院の鐘の音が鳴らないと幽霊がひどい歌を歌って皆が辛い目に合うんだ」

「端的だな」

少年はぼつりと呟くと、別に困った顔もせずに再びノミを弄りだす。「それより」、と遠慮がちに言った。

「前から聞きたかったんだけど。兄ちゃん、冥魔術が使えるよな？」
「かん、と釘を最奥まで穿ち、カイムは手を休めた。キリアは続ける。」

「さっきもそうだ、あれが冥獣だとは思えないし、召喚したのかどうかも分からないけど……とにかく、兄ちゃんはあるオカミみたいなキモイ幽霊を呼んだ。瞬時にだ。これってどういう冥魔術？」

「王都には」

言葉を紡ぎつつ、紡ぐ言葉を選ぶ。屋台の強度を確かめるために何度か釘の繋ぎ目を押してみるが、びくともしない。

「冥魔術を使える人間なんてざらにいるからね。俺もちょっと齧っただけなんだよ、風の冥魔術を。あの幽霊も風に声みたいなものを乗せて呼び寄せた」

「発動経路は？ オロー式？ ゾルデア式？」

「……」

発動経路。なんだそれは？ 聞いた事があるような、無いような。冥魔術を使うには、常世から現世に「力の源」を引きずり出す際に、自分を通してある種の力場転換装置を組み込まなくてはならないと聞いたことがある。そのやり方が数通りあって、それぞれに名前が付けられているということだろうか。多分、そうだ。

カイムは少し笑うと、キリアに尋ねた。

「君は？」

「おれはオロー式」

「じゃあ、違う方じゃないかな」

キリアはノミに視線を落とし、考え込むような間を持つてから、再びカイムの黒い瞳を見つめる。

「嘘だ」

「……嘘？」

「ゾルデア式は書式を介して冥府の力をこちらに持ち出す、『召喚式』の発動経路だ。一方で、オロー式は自らの直視や発声で発動させる。執事の兄ちゃんもおれも、オロー式だ。兄ちゃんは書式をいつ描いた？ 描いてないよな。アルプーの館を壊した時だって、何も見てなかった。アルプーを見ていた。けど、発動した風の冥魔術は、兄ちゃんの見えていない館の外殻に発生してた」

カイムは呆気にとられて少年の厳しい顔を凝視した。

まさか、こんな辺鄙な村に、これほどの知識を持つ少年が存在するとは。

「兄ちゃんのは、ゾルデア式でもオロー式でもない。だとすれば、後は……『クラビト式』しか無いじゃないか」

「クラビト式？」

そんなものまであるのか。

驚いたカイムの表情に、キリアも徐々に驚いた表情を作る。そして深く溜息をつく、首を振って座り込んでいた足を崩した。

「あのさあ、本気で知らないの？　ちよつと齧ったって言つてたろ。ゾルデア式もオロー式もクラブト式も、子供がご飯を食べるためにスプーンの使い方を教わるようなもんなんだぜ。じゃあ、クラブト式を使える人間が存在しないことも知らないの？」

「……ごめん、ぜんぜん知らなかった。子供の頃からなんとなく使えたから、特に勉強もせずそのまま今まで生きてきたんだ。発動経路っていうのも、よく知らない」

「滅茶苦茶だなあ」

心底呆れたようにキリアは笑い、曇天を仰いだ。

つまり少年は、「お前のような冥魔術の使い方をする人間は存在しない」と言うのだ。

カイムはどう応えようかと迷う。どう返事をしたところで、キリアの発見したカイムの中の異端は揺るがしうが無い。困って屋台に視線を戻した時、キリアが、

「兄ちゃんて、たまにガリに似てるな」

と言った。

「それは無い」

木目のささくれを削りながら、きつぱりと断言する。

あんなのと友達だと思われるのは別に気にしないが、あんなのと同類だと思われるのは　やっぱり少しだけ困る。自分は色に変な名前を付けないし、台風の日にぴょんぴょん飛び跳ねないし、前後不覚に陥って人を木槌で殴らないし、幽霊の歌を良いと思うこともない。異性を気安く家にも呼ばないし、一晩過ごすことも無い。

ばき、と音がした。

「あーあ」

握り締めていた屋台の脚が折れたのだ。少年の呆れた嘆息に、カイムは再び困惑したような笑みを乗せ、同じく曇天を仰いだ。

「ゾルデア式っていうのは、オロー式に出来ないことをカバーする感じかな。オロー式では、まず術者本人が直視出来てホップ、対象物を手に取るように把握出来てステップ、かつ呪文を発声してジャンプって感じ。これだと目に見えない遠距離では一切冥魔術は発動出来ないし、術自体も刹那的だ。それを補うのがゾルデア式。声と違って書式は形として残るから、継続的な術を使用するのに効果的だ。例えば、植木の花の鮮度を長く保つとか、嫌な奴に風邪をひかせるとか」

キリアはノミで地面を掘り、図形を描きながら説明を続ける。

ぐるぐると屋台の脚に包帯を巻きつけ、固定しながら、カイムは上目遣いに少年の弁舌に頷いた。

「へえ。じゃあ、ゾルデア式も勉強しておくと便利なのかな」

「うーん、便利だけだね。右利き左利きみたいな癖で、最初にどっちかを習得した人間はもう一方を習得するのは難しいみたいだ。多少は使えるらしいけど、おれは取り敢えずオロー式一直線」

少年は得意げになって話し続ける。年上で何でも出来るような雰囲気のあるカイムが、真剣に自分の教授に頷くのが妙に心地良いのだ。

あれほど強力な風の冥魔術を使うカイムが、本当に冥魔術について何一つ知らない事は信じられないが、彼はキリアのつたない説明にもいちいち感心したように頷き、時々考えこむように手に収まった屋台の脚の傷痕を見つめる。一応、折れた脚は地面に立つまでに回復はしたが、傍目に見てどうにも痛々しい。

「で、クラビト式ってのは。学者先生のつけた単なる烙印」

「と言うと？」

一呼吸置いて、勿体ぶる調子で少年は続ける。

「本家本元の冥人が使う発動経路のこと。誰も冥人を見たことが無

い癖に、概念だけは作っておこうってさ。つまり、他の二つと違って、『発動経路』が『皆無』」

「……力場の転換だかを行わずに、冥界の力をこの世界に引きずり出すということ？」

そういうことだ。

そもそも、冥魔術の源自体、どこからやって来るのか誰も知らない。聖教会は冥界を満たす力だと言うし、冥魔術協会は冥府を形成する精神だと言っている。とにかく、「どこか」から自らを通して外に力を引きずり出すという事だけは分かっていた。

人間は瑕疵^{かし}ある存在ゆえに力を引きずり出す際に手順が必要であるが、冥界、或いは冥府に存在する冥人^{クラブト}は、魔性の存在ゆえに手順を必要とせずいくらでも力を引き出せるというのが学者の机上の理論だ。冥魔術協会に至っては、冥人そのものが冥府と同義であり、力そのものが力を発するのにどのような手順が必要だろうか、とまで主張している。

「それがクラブト式か。それじゃ瑕疵ある存在である人間はオロース式かゾルデア式に頼るしか無いんだね」

先程から感心したように何度も頷くカイムの本心は、見えてこない。自分がクラブト式かもしれないということに対して、何の言及もしないのだ。アルプーの館を壊した時と同じように。

キリアは鎌をかけるつもりで、桜の樹の幹に背を預けながら言った。

「冥人つてのは、お菓子を食べたことが無いのかね？」

「はあ？」

カイムがなんとも形容しがたい不思議な表情をした時、背後の草むららがさがさと蠢いた。ぎよつとして二人が振り向くと、両手一杯に砂糖菓子を抱えたジスティアスが、周囲を伺うように顔を出した。

彼女は啞然と見下ろしている二人の村民がいることに気付くと、一瞬間をこわばらせ、

「わ……我輩は犬であるわん」

「そうですね。夏場にお菓子をかかえて地面を這うと蟻がたかりますよ」

「うぎゃっ！ わ、私のおやつがー！」

カイムの落ち着いた一言に草むらから飛び出す。菓子どころか体中蟻だらけだった。

少女は泣く泣く砂糖菓子を愚蟻にくれてやると、きつと二人を睥睨した。

「我輩はジスティアスじゃないからな！ お前たちは夏の白昼夢に踊らされているのだわん。我輩は犬なのだわん」

「そうですね。バトラー殿に黙って一人で外を徘徊すると、後で怒られますよ。犬っころ」

「犬っこ……。そ、それでいいのだ。バトラーには内緒にするのだ、我輩はすぐに帰るのだから。わん」

相変わらず言葉の端々に何か漏れている気がする青年に、釈然としない表情で視線を投げかけると、ジスティアスは再び草むらに戻ろうとした。キリアは「何で徘徊してるんすか？」と何気なく尋ねた。

少女はその言葉に振り返ると、思案にくれる相貌でしばし佇む。秘密を暴露しようかしまいか、迷っている様子は明らかである。

カイムがそつとキリアに囁いた。

「なんでって、犬だからでしょ？」

「兄ちゃん、前から言いたい事があつたんだけど、あんた絡みにくいんだよ」

キリアは眉間に皺を寄せ、唸るように返す。

この青年は時折、馬鹿にしているのか冗談を言っているのか自棄になっているのか、判別がつかないことがある。馬鹿一辺倒のガリーナに比べると、相手をするのが難しい。この辺は自分の修行不足であると思い、キリアは気合を入れなおした。

「あのな。バトラーには秘密だぞ」

ジスティアスは躊躇いがちに話し始めた。まだ蟻が必死に服にしがみついている。そっちの方が気になって仕方ないが、仮にも貴族である少女の服を掃うことなど出来ない。

「この間、うちの館で保護した迷子が、ガリの聖女について話したんだ。それで興味を持ってパンフレットとか取り寄せて、色々調べて、面白そうだから逢いたいと思って。世界の均衡を守るという重大な責務を負っている聖女だろう？ お互い責任ある立場、領主である私と話も合うかなあって」

「合わないと思いますよ」

「合わないと思うよ」

同時に二人に応えられ、ジスティアスは一瞬顎を引いた。

「だ、だって……歳もそんなに離れてないって聞くし、聖女だから淑やかで秘密を守ってくれそうだし、色々話してみたいことが」

キリアとカームは顔を見合わせた。

「淑やかかなあ？」

「聞くなよ、否定する労力さえ起きない」

「でも名前負けしてるよね。聖女って」

「少なくとも聖なる女ではないな」

「責務も負ってるのかなあ？」

「鐘鳴らして彼氏作らないことぐらいじゃない？ 守ってるの」

「……どっちも破られたしね」

「……ああ、そういえば」

「そもそも木槌で暴れかねない」

「十一連撃を習得中らしいよ」

二人はジスティアスに視線を戻した。

「合わないと思いますよ」

「合わないと思うよ」

再び同時に応えられて、ジスティアスは口を噤んだ。否定された事に気分を害したのか、頬を膨らませ、青い瞳を潤ませて地面の砂糖菓子に視線を落とす。「逢ってみなきゃ分からないもん」と呟い

て、蟻がせつせと食料を解体するのを凝視し始めた。

（ああ、選挙どうしよう。本当にどっちもどっちだ）

きつと凄まじい接戦になるだろう、とキリアは領主の様子を眺めてぼんやりと考えた。

その時だった。背後の草むらが動き、中から黒髪のバトラーが飛び出したのだ。

「お嬢、大人しく控え室の壁にらくがきしているかと思えば、こんなところに！ 勝手に出ちゃ駄目だって言ったでしょう、あんた領主なんですから。それからあの絵、なんか死んだばあさんが見えるとか言つて老人達が拝み始めてますよ。変なもん描いて人心を惑わせるのはやめなさい！」

ぎよつとした表情で後ろ退ったジスティアスは、柳眉を下げて現れた部下を見上げる。

「どうしてここが分かったんだ？ 誰にも見られなかったのに……」

「蟻が葬列のごとく脈々と控え室からここまで大河を作ってますからね。しかも途中で駄菓子屋に寄ってる。あんた、控え室のお菓子を食べ歩きながら駄菓子屋でまたしても買い食いしてここまで来たでしょう」

萌黄色の瞳はあくまで冷静で、言葉だけが激しい。主の襟首を掴むと、頭から体にかけて何度もぱんぱんと叩き始める。お仕置きか、と思いきや、彼女の体にたかった蟻を払い落としているのだった。

ばらばらと大地に落下していく蟻に目もくれず、ジスティアスは相手を見上げて小さな声で言った。

「あの……お小遣い、下げたりしないよね？ 買い食いじゃなくて、蟻さんが可哀想だったから恵んであげようと思ったの」

バトラーは鼻を鳴らすと、「何故」と返した。

「お小遣いが下がらないと考えるのか不思議ですね。あんたのその優しさがお小遣いを奪うのです。さあ、戻りましょう。選挙をやると言い出したのはあんたでしょう」

「うつつうつつうつつ」

いじわるだ、と呟き、またしても目にいっぱい涙を溜めてしまった少女を見て、キリアは不憫でなくなつた。実際、彼女程度の馬鹿ぶりなら、ガリーナの足元にも及ばない。ガリーナ以上の馬鹿がこの世界に存在するのも疑問だ。ガリーナは馬鹿の権威なのだ。それなのに、ガリーナは罰を受けることなく、ジスティアスは厳しい罰　お小遣いを更に下げるなんて、拷問だ　を受けている。

これが、平民と責務ある貴族の差なのだろうか。

それともガリーナと比較すること自体に無理があるのだろうか。

「可哀想に。話し相手が欲しかっただけでしよう、犬の振りまでして」

カイクがぼつりと呟いた。バトラーは振り返ると、目を擦り、青年を正面から睨みつける。

「犬の振り？」

「ち、違う！　守銭奴ころ助の真似して遊んでたんだ！」

青ざめて首を振る少女に視線を戻すことなく、バトラーはカイクに告げた。

「ジスティアス家において、お嬢の教育方針は私に一任されている。話し相手になら私になる。口を出さないで貰おう」

「出していませんよ。俺もアルプー様の元に居た人間だ、ジスティアス家の事情はそれなりに知っている。ただ、ガリの聖女がジスティアス様に逢いたがっているので、無礼を承知で引き合わせようと俺が誘つたんです。非難なら俺が受けるべきですが」

キリアは驚いて青年の顔を見上げた。少女も吃驚して目を見開いている。

少女を庇おうとしているのか　それなら、とキリアも追従するような笑みを浮かべて言った。

「お菓子もおれがあげたんだ。お菓子以上に立派な贈り物って思い浮かばなかったから。おれ、ガキだし」

輝かんばかりの笑顔で言うと、カイクもキリアを一瞥した。その目が一瞬だけ笑みを含んだ気がして、不思議と気分が良くなる。

「本当ですか、お嬢？」

ジスティアスは困惑したように二人を見つめていたが、やがて躊躇いがちに頷いた。

「判りました。これは、身分を弁えない無礼な行いです。貴族たる者が悪意ある者に襲われかねない、危険な状況を作ったのですから。彼らの罪状は――」

「やめろ、私が彼らの行いを許可したの！ 彼らに罪は無い！」

「ならば、やはりあんたに責任があるわけですね」

「……それは、そのう……あのう……」

バトラーは溜息をつく、呆れたように周囲を見回した。「まあ、良いでしょう。カймストーン、そしてお嬢のお互いに問題があったとして、不問とします」

キリアはその言葉を聞いて、脇からどつと汗が噴出すを感じた。自覚のないままに緊張していたらしい。それはそうだろう、領主誘拐未遂という罪状さえ、無理矢理にでもこじつける事の出来る状況だったのだ。安堵に息を吐くと、隣の青年が相変わらず平然としているのが妙に頼もしく見えた。

（やっぱり、大人だなあ。兄ちゃんは）

彼は何の躊躇も安堵も見せず、真っ直ぐに黒い瞳でバトラーの視線を受けている。すると、萌黄色の瞳の男はカймの前に立ち、耳元で囁いた。

「嘘はもつと上手に吐くものだ、料理人。冥獣を召喚した時もな」

「勘違いされていますね。あれは冥獣ではありません、ただの幽霊です。俺に冥獣を召喚する力はありませんよ。穴が開いていないと、召喚は不可能でしょう」

バトラーはカймの肩越しに家と木々を眺めたまま、小さく笑った。そのまま踵を返すと、来た道を引き返してゆく。蟻の葬列を辿り、控え室へと戻るのだろう。その後姿を追いかけているから、ジスティアスは一瞬こちらを振り返り、再び何も言わずにバトラーの後についていった。

その姿が木の陰に隠れ家々の向こうに消えてから、ようやくキリアは盛大な溜息をついた。

「寿命縮んだぜ……十日ほど」

考え込むように二人の去った方向を凝視していたカймも、その言葉で笑みを見せた。

「キリア、なかなか男らしいじゃないか。そういうところを大事にしていけば、きっとモテるぞ」

「まじで？ 超大事にする、超育む。じゃあ、兄ちゃんもモテるだろうな」

「はは、駄目だね。いくら好かれても自分が好きにならなきゃ意味が無い。それに、例え好き合っても」

「ても？」

カймはもう一度笑うと、「なんでもない」と呟いた。人の好い笑顔でキリアの頭を軽く叩くと、もう一台の屋台を作るために金槌に手を伸ばした。キリアはその様子を眺めていたが、今度は手伝うためにポケットの中をまさぐった。出てきたのは、ノミ一本と釘数本だった。諦めて再び木に背を預けて座り込む。

曇天の下、鳥の無く声と、楽団倶楽部の練習と、カйм同様工事に勤しんでいる人間たちの楽しい掛け声が響いてくる。かすかに雨の匂いが強くなってきた。

「あの子さ、可哀想だな」と呟く。

「犬っころ？」

「……もう忘れてやれよ」

残酷な大人め。

ますます不憫になってきて、キリアは厚い雲の流れを見上げた。蝉の声はいつしか止んでいる。それでも暑さは変わらない。

「アホの子かと思ってたけど、アホなりに結構頑張ってるんじゃない？ それなのに、領主だからって事であんなに厳しく躾けられてさ。きつと本当は領主に向いてないんだよ、あの子の生来の気質が。まだあんなに子供なのに」

キリアより年上のはずだったが、それよりも幼く見える。キリア自身が同年代の少年よりも大人びている所為もあるのだろうけれど。

「犬っ……あの子はね、妾の子なんだ」

金槌の合間に聞こえた声に、キリアは視線を地上に戻した。しゃがみこんで背を向けているカイムの腕は、休むことなく釘を木板に穿っている。

「妾の子？」

「妾という言い方が正しいかどうか、誰にも解らないけどね。確かにあの子は領主にしては幼すぎる、だから実権は祖父である前領主が握っていると聞いていたけれど、どうも違うみたいだ。あのバトルが実質的には統治の大部分を握っているんだろう」

それは一介の小村の子供であるキリアが知る由もない話だった。時折忘れかけるが、カイムは曲りなりにもかつてアルプーの厨房を預かっていた重要な地位の人間なのだ。民草の耳には届かない上流階級の噂話も、好きなだけ仕入れることが出来ただろう。

キリアが黙って聞いているのを確認したのか、彼は続けた。

「前領主には一人息子がいたんだ。けれどこれが放蕩だから、公の場には殆ど現れない。最初は病弱だったから存在を秘匿されていたと聞いたけど、そこらじゅうで遊び呆けて、仕舞いには死んだとも言われている。とにかく、問題のある一人息子だった。普通は子を沢山生す貴族だけど、前ジスティアス領主は一途な男で、夭逝した妻以外に新しい妻を娶ろうとしなかった。だから血の繋がる跡継ぎが、この息子しかいなかったんだよ」

ところが、と息を吐くように言う。

「その跡継ぎが死んじゃうだろ？ そうすると、お家騒動が勃発するわけだよ。領主の座を狙っている親族一同は沢山いるし、どういつもこいつも贅に人生を捧げたるくなく人間じゃない。前ジスティアス領主は困り果ててしまった。血は何よりも大切なものだし、このままだと統治問題にも関わるから。するとある日、死んだ息子がこの馬の骨とも知れない女に産ませた子が孤児院にいるという話が飛

び込んできた。話半分に会いに行くと、その子はまだ五、六歳で、下町の子供たちと一緒にいたずらをするやんちゃな子供だった。とても貴族の血を引いているとは思えなかったが、その子はジスティアス家の紋章を持っていたんだ。それで、子供はすぐに引き取られ、領主たるべく教育を受けつつ、傀儡として祭り上げられた。それが、彼女だよ」

キリアは 反吐が出そうになるのを押し戻すのに必死だった。

お家騒動？ 自分勝手に子供を作って、自分勝手に政治材料として使う？ 何も知らない子供は、突然友達と引き離されて？

「貴族様っていうのは、人の人生を何だと思ってるんだ！ とんでもねえ奴らだ！」

「ガリーナは？」

小さな言葉に、キリアは一瞬耳を疑った。カィムを見ると、相変わらず背を向けて屋台を組み立てている。もう殆ど出来上がっていた。

「ガリが、何だって？」

「聖女のシステムさ。彼女は一生家族を持つ事を許されない。志願して聖女になったの？ それとも、あらかじめ決まっていたの？」

キリアは息を飲み込んだ。

聖女になる者は、生まれる前から決まっている。生まれながらにして聖女なのだ。

でも、無理矢理聖女にさせている訳では ある。

聖女がいなくなれば、村が滅びる、だからそれは仕方が 無い。

第一、彼女は聖女が辛いだなんて一言も言っていない。それどころか、村の誰よりも一番幸せそうに毎日暮らしている。聖女がガリーナを束縛する足枷になり得ると思ったことはあるが、彼女は足枷だと感じたことは無いはずだ。多分、そうだ。そうに違いない。そう思って生きてきた。村中の誰もが。

「色々あるんだよ。世の中には」

そう呟いたカィムの言葉は、何よりも強くキリアの心を揺らした。

二台目の屋台は、程なくして完成する。

カイルが立ち上がってその強度を確かめている時、ファイが丸いお腹を突き出して忙しなげに食材を運んでいる姿が遠くに見えた。ぱん、と小さな花火が空に上がる。そろそろ選挙祭が始まる頃合だった。

青年は屋台から離れると、金槌で自分の肩を軽く叩きながら主会場に向かったファイの元へと歩き出した。

正氣に戻ったキリアは、慌ててその後を追う。

「あれ、ガリを探すんじゃないの？」

「ん？ ああ」

カイルは振り向き、小さく口の端を上げる。

「焦らなくても大丈夫だよ。きつと向こうから動く」

「はあ？」

意味が解らず、混乱した頭で眉を顰める少年に、カイルはもう一度笑ってみせた。

花火が上がる。明るい雨雲の下で白い煙がはじけると、集まった人々の波から拍手が広がった。

「あー、あー、メガテス、メガテス」

急いで拵えた舞台の上から、厚紙で作ったメガホンに口を寄せてマールが叫ぶ。キリアとカイムは、会場の一番後ろについた。背の高い青年は問題なく前が見えるが、少年であるキリアはぴょんぴょん飛び跳ねて人ごみの隙間から舞台を垣間見る。副村長の背後には、二人の黒服が控えていた。大勢の好奇の視線を受けても一顧だにしないのは、彼らが半分以上貴族の世界に体を浸しているからだろうか。

「レディースアンド野郎ども、本日はお日柄も良く」

物滅（注釈：十六曜の一つ。物がやたらと壊れる凶日）だぞー、とマールに対して野次が上がる。

「うるせえ唐変木、男なら迷信の一つや二つ根性で乗り越えろや！という訳で我が村の主人を決める選挙祭、ただ今をもって開始とします！」

わっと歓声、湧き起こる拍手。キリアも飛び跳ねながらぱちぱちと両手を叩くが、隣のカイムは腕を組んだまま黙って前を見据えている。

「ルールは簡単！ 今からジスティアス様、アルプー様、両領主様に出し物をしてもらいます。それを見て、どちらがより我が村の主に相応しいかを選び、紙に書いて箱に入れます。最後にその数を集計し、より多い方が主となるわけです。ちなみに賄賂も身内票も無しということで一つ」

「出し物？ なんか芸人みたい」キリアが言うと、カイムが「芸人でしょ」と返す。

「お手でもするんじゃない。我輩に命令するんじゃないわん！とか

言つて。それだけで、真実を見ようとしなない夢みがちな思春期上の男の票は獲得するだろうね」

「兄ちゃんさあ、意図しないところで命狙われるタイプだよー」

「……なんで俺が命を狙われた事があるって分かるの？」

「畜生それがボケだと思えない自分と相手の間柄が憎い」

二人の執事にひっぱられて領主達が舞台上に姿を現した。屋台から料理をつまんで咀嚼していた村民達は、初めて目にする主役達の姿に、一瞬の沈黙の後、爆発のような歓声を上げる。

「アルプー様、あんなに素敵なたななんて！ お優しい上にハンスムだなんて、最高よ！」

「ジスティアス様萌えー！ お兄ちゃんって呼んでくださいー！」

「アニキと呼ばせて！」

「踏みつけられたい！」

「貢税が下がったお陰で髪も生えてきました」

「ええ尻しとるわい、嫁に欲しいのう」

「お爺ちゃん、それは生垣ですよ」

赤と黒を基調とした男装の小柄な美少女には雄叫びを、乗馬用の軽装をした細身の男性には嬌声を。誰かが太鼓でも鳴らしているかのような高音に、カイルとキリアは思わず耳を塞ぐ。

当の二人は思いもかけない村民達の反応に驚き、硬直したようにその場に佇んでいる。

出し物の必要は無いかもしれないな、とキリアは思った。今この瞬間で、ほぼ全ての人間がどちらに票を入れるかを決めたに違いない。マールブルがメガホンを口に押し当て、大声を張り上げる。

「それでは、まずはアルプー様、どうぞ」

「わ、私か？」アルプーが困惑したまま前に出ると、嬌声は一際大きくなった。彼は少し考えていたようだが、やがて咳払いをした。

「村民諸君、思うに領地制度とは――」

しかし、始まったのが演説だからいけない。誰一人として彼の言葉を理解する事が出来ず、村民はぼかんと口を開けて舞台の上の男

を眺めるだけだった。やがてこつくりこつくり船を漕ぎ始める者や、料理に熱中する者が増え、アルプーが演説を終える頃にはほとんど誰も彼を見ていなかった。

「……あ、はい、終わりましたか？ お疲れ様です。いやはや大変悲しいお話でしたな、特に主人公の娘がものもらいにかかる所なんて涙なくしては聞けませんでした。それでは、次はジスティアス様どうぞ！」

「くそつ、これだから愚かな民草は嫌なのだ！」

苛々と踵で地面を打つアルプーに、ジスティアスは鼻で笑ってみせる。「ふん、ろくな教育を受けてない者にあんな話が理解出来るものか。この私ですら途中で寝てちよつと良い夢みてたんだからな！」

「黙れ餓鬼が。十年後を見ている、我が領土全てに教育制度を浸透させて立派な学校を沢山作ってやる！」

「ふーんだ私だってやるもんねーバーカバーカお前の母上化粧濃いー」

「わ、私のマーマを悪く言うなッ！」

二人の壇上の小競り合いは、例の如く執事達の背後からの一撃で中断するまで続いた。

頭に小さなたんこぶを作ったジスティアスは、舞台の中央に立つと、自信たっぷりに言い放った。

「歌を歌います！」

そしてこの国に伝わる童謡を二つほど歌ってみせた。それは所々の歌詞が、例えば「青い空」が「蛙の卵」や、「お母さん笑った」が「姑キレた」といった間違いを含む拙いものだったが、細く少女らしい声音にその素人臭さがよく似合っていた。歌い終わってぺこりと頭を下げる時には、主に男性を中心とした熱の籠った拍手喝采が送られる。

「くそ、よく観察しているな小娘め、」ジスティアスの自慢げな微笑を受け、アルプーが再び前に立つ。また小難しい話が飛び出すの

かと人々は食べ物に目を落とすのだが、

「これは本当にあった話だ。ある雨の日の朝、私はふと誰かの声を聞いて目を醒ました。しかし、不思議な事に、部屋を見回しても誰もいない。夢か、と私は再び布団にくるまって寝返りをうったのだが、その時、視界の隅で何かが動いた気がした。何気なく私は仰向けになり、天井を見上げたのだ。するとそこに張り付いていたのは

—

思いもよらず始まった怪談に、誰もが顔を青くして領主の姿に釘付けになってしまった。

「……うう、エグい。やっぱり呪われてるんじゃないか、あのおっさん……」

キリアが枝豆を口に挟んだまま、身震いと共に嘆息する。時々悲鳴のようなものが上がるのは、舞台袖の上の方から透き通った少年達が出番を待てないように顔を出して聴衆を見下ろす所為だろう。

「という訳で、食べ物を粗末にすると怖い目に逢う、という教訓であるな。諸君らもゆめゆめ忘れぬように」

アルプーがそう締めて終わると、張り詰めていた場の空気がほつと緩む。曲がりなりにも流石は領主で、教養の無い民草の注目をどうしたら集められるかをジスティアスの下手な歌に見出したのだ。既に聴衆のほとんどは、聞いたこともない貴族の館での怪談に興味津々の様子だった。キリアもまた同様だったので、

「……そう言えば何度か、晩御飯を盛大に残した夜に枕元に立った気が」

という隣の青年の呟きに耳を塞いだ。

その後の選挙演説は実にバラエティに富み、ジスティアスが逆立ちをしてヘソを出せばアルプーが弓術を披露するといった調子で、まさに熾烈を極めた。やがて太陽が斜めに傾いた頃、マールブルから人々にさらの紙片が配布される。

「我らが領主にジスティアス様が相応しいと思ったら丸を、アルプー様が相応しいと思ったらバツを書いて、舞台の前の箱に入れるよ

うに。自分の名前は書かなくてよろしい！」

副村長の鶴の一声で、人々は投票箱へと向けてぞろぞろと動き始め、やがて舞台の前は密集する人の波に埋もれてしまう。どちらに入れようかと未だに迷っていたキリアは、紙片も持たずにじつと人の群れを凝視しているカイムを怪訝に思った。ふと前方を見ると、舞台の裏側から体を半分突き出して今や遅しとそわそわしている青いспанコール服の美少年達の姿があった。

「なあ、あれって兄ちゃんの召喚冥獣だよな？ 何してんの、あいっら」

カイムは返事をしなかった。

ただじつと、何かを探すように黒曜石の輝きを放つ瞳を前方に向け 不意にはじかれたように背後を振り返った。

「もう呼んだのか」

「え？」

そして青年は大地を蹴り、舞台を背に蒸し暑い空気を切り裂くように駆け出す。

「どこ行くんだよ！ 選挙は！？」

「君と逆の人間に入れておいてくれ！」

振り返りもせずに落とす言葉を最後に、カイムの姿はあつという間に道の果てへと消えてしまった。キリアも彼を追いたかったが、その俊足に勝つ自信が無かったので、諦めて二つの紙片に視線を落とす。

ジスティアスカ、アルプー。

どちらに入れようかと暫く懊悩していたが、やがて「あ」と手を叩く。

「兄ちゃんとオレで逆の人間に入れるなら、一枚ずつ丸とバツ書きや良いんじゃない」

キリアの苦悩を見透かした大人の態度なのか、単に面倒臭かったのか やはりカイムの言葉の根拠には至らなかった。墨で丸とバツを書き、雨の匂いのする空を見上げる。

舞台の少年達は、さつきより体を表に出して人々を見下ろしていた。

カイルは家々をすり抜け、広い畑や庭を通り抜け、やがて樹が空を覆う小道にまで走り出ると、風の匂いを嗅いだ。

間違いない、『下』の匂いだ。

それはここには不釣り合いなほど濃厚で透き通った、異界の芳香。冥魔術を使う時に僅かに発せられる光と同じ香りだ。カイル以外の誰かがこの香りに気付くかどうかは定かではないが、もしかしたらキリアのように才能のある人間なら判るかもしれない。

あいつから目を離すつもりはなかったから、これは失態だ。だが、厄介なものを呼ばれた訳ではなさそうだった。そもそもここに呼ばれた者は、どんな強大な者でも大人しくなる。陸に上がった魚のようなものだ、吸う空気が違う。

足が止まったのは、古い教会の玄関前でだった。

曇天に映える古の建造物を見上げ、眉を顰める。ここは一番最初にガリーナを探しに来た場所で、どの部屋にも彼女は居なかったことを確認している。だが、芳香はここから漂っていた。そして今や、徐々に薄まりつつある。何者かが発動させた冥魔術は、その執行人と共に既にこの場を後にしているようだった。

（殺して……無いだろう、な）

不意に想像だにしなかった不吉な言葉が胸中に湧き上がり、カイルはぞつと体を震わせた。大丈夫、ガリーの聖女だ。ジスティアスも逢いたがっていた人間を、殺すはずなどない。大丈夫、大丈夫だ。

ほんの数瞬だったろうその畏怖すべき妄想をかなぐり捨て、カイルは教会の中へと足を踏み入れる。

ざっと見たところは正午に来た時と同じだが、芳香は鼻腔を通して目の奥で静かな色となる。もしも最初に来た時にもっと注意深くしていたら、この色彩にも気付いていたかもしれない。

消えるほどに微かな芳香を、色彩を頼りに、階段を上がる。石の壁は、夏だというのに妙に冷ややかに上階へと誘った。暗い色の階段が終わった途端に目に入ったのは、質素な家具と、部屋中に散らばった色とりどりの布や作りかけの縫い物だった。机の上には日記らしいものが置かれている。きつちり鍵付きになっているあたり、余程ガリーナが見られたくない代物なのだろう。

カイムはガリーナの部屋を見回し、やがてある一点に視軸を置く。今日この部屋に来るのは二度目だ。年頃の少女の家に許可無く上がりこむのも今日二度目。やはりひどく悪いことをしているような気がして、居心地が悪い。冥界の芳香とは違う、どこか芳しい香りが漂っていることにも息が詰まりそうになる。きっとガリーナはこの香りにも気付いていないだろう、自分の芳香というのはとかく気付きにくいものだ。

「ガリーナ」

部屋をゆっくり進み、洋服だんすの前に立つ。樹の幹の色をした取っ手を掴み、静かに力を入れ、呟く。

「開けるよ」

戸を引くと、閉じ込められていた甘い香りの奔流が溢れ出してカイムの顔を撫でた。鮮やかな服の色彩が目飛び込み、それと同時に董色のものが飛び出し

「もおおお！！ 遅いです、遅いですー！！ どれだけ待ったと思ってるんですか、カイムさんのノロマさんッ！ 次はカイムさんの番ですからね、さあ早く隠れてください！ 容赦しませんからねすぐ見つけちゃいますからね！ 覚悟してくださいーいー！！」

洋服だんすから飛び出してきたガリーナは、半泣きでカイムの胸を小突きまわす。そしてすぐに拗ねたように頬を膨らませてそっぽを向いてしまった。

カイムは啞然としつつも、やがて微笑を浮かべる。

「良かった、元気そうで。どこか痛いところは？ 何もされなかった？」

「されましたよ。カイクさんにほつたらかしにされました。あんまり長い事たんすの中で座り込んでたから膝とお尻が痛くて」

ぶうと不貞腐れる彼女の言っていることの意味はさっぱり判らない。

けれど、大体の筋書きは解った。

「ずっとここに隠れてたんだね？」

「だって移動するとかくれんぼじゃないじゃないですかー！ もう、すっかりしてください！」

なるほど、とカイクは頷くと、天井を見上げた。

「かくれんぼ、ね。俺が誘ったんだ？」

「そうですね、朝早くにカイクさんがかくれんぼしようって。言いだしっぺはカイクさんなんですからね！」

「この真上は鐘楼だね？」

「そうですね……って、もう、本当にちゃんと探してくれたんですか？ すごく心細かったんですよ、子供の頃にかくれんぼしてそのまま忘れられて夜まで樹のうろの中でじっとしてた記憶が蘇って泣きそうになって聞いてくださーい！！」

鐘楼への梯子を上がり始めたカイクの後ろを、憤慨した董色のガリーナがついてくる。梯子を上りきると、途端に高い灰の空が開けた。この近辺でここより高い場所は無いだろう、足場は少々狭いが、それを補って余りあるほどの開放感だった。ちょうど頭の位置に鐘が釣り下がっている。ガリーナは毎日ここで村と空を見下ろしながら、鐘を鳴らしているのだ。

聖女が毎日執り行う神聖な儀式の場に取りこんだ罪悪感と、ほんの僅かな優越感に、カイクは俯いて地面に膝をついた。

（ゾルデア式……だっけか。魔方陣や書式を用いて継続的に冥界の力を流用させる魔術）

残り香はここが最も強い。

例えば、だ。

この場所に、予め魔方陣を書いた紙を設置し、発動させたまま放

置する。カイルやキリアのそれとは違うこの遣り方は、冥魔術の効果を継続させることが出来るが、つまりそれは、絶える事無く継続的に冥界の力を場に蓄積することができる、ということだ。時間をかけて蓄積された冥界の力はこの溜まり、破裂を待つように膨らみ続ける。後は簡単だ。第二の発動、つまり破裂を促せば、蓄積された冥魔術は完成する。オロー式では不可能な、多量の冥界の力を必要とする魔術には不可欠の儀式だった。

そう、例えば、冥獣の召喚など。

（聖女を媒介にしたつもりか？ けれど、多分それは術者の勘違いだ。この村自体がそもそも冥界と妙に繋がっている節がある。俺の屋敷の幽霊もその口だから、ここは国のどこよりも冥獣の召喚には最高の環境だ 聖女自体は恐らく召喚に必要無い）

何者かがカイルを騙り、媒介と考える聖女をこの場所に固定させ、召喚の魔術を執行する。

そいつはつい先程第二の発動を実行し、冥獣の召喚を済ませると早々にこの場を離れた。ここに戻ってくることは絶対に無いだろう。ガリーナが傷つけられるという杞憂は泡沫の如く消え去ったが、カイルはやはり曖昧な笑みで鐘楼の地面に放置された、恐らく紙の重しとして使用された四つの小石を手取る。

「こちらに召喚された冥獣は無力だ。術者もさっさとこの村を離れる。最早なんの害も無い。だからと言って、簡単に許してもいいものかな？」

「いいえ、許しません」

上から降ってきた言葉に、カイルは顔を上げた。

相変わらず半泣きの聖女が、木槌片手に青年を見下ろしている。

「さつきから何かいい匂いがします！ 花火もあがってます！ カイルさん、私をほったらかしにしてお祭に行ってたんじゃないでしょうね？ ひどすぎます、あんまりです、訴えてやります！」

狭い鐘楼の上ですいずいと詰め寄ってくる聖女に身を反らし、カイルは引き攣った笑みを浮かべた。君にかくれんぼを提案したのは

偽物だよ　なんて信じそうにない。そもそもいい歳をした大人がかくれんぼなんか提案するものか。ガリーナなら、そんな事も疑わずに承諾したのだろうけれど。

翡翠色の強い視線を下から受けたまま、暫くの間後に、カイムはもう一度愛想笑いをみせる。

「その服の色、なんていうの？」

ガリーナが木槌を握った手を振り上げると、遠く離れた祭会場で破滅的音痴な死の楽曲が響いてきたのは、ほとんど同時だった。

キリアはその奔流に木っ端のごとく飲み込まれる意識で、それが何なのか必死に考えを巡らせた。周囲を見渡せば、皆が皆、同じような苦悶と混乱の表情で耳を押さえている。まるで雨上がりの川に落ちたような、宵のバーババ亭に潜り込んだような、学問所の成績が悪くてお母さんに叱られている時のような　ああ、そうか。キリアは瞋目した。今までの自分の認識が引つ繰り返されるような衝撃、人生という名の坂にぽっかり空いた落とし穴、青空に轟く稲妻。

これは、歌だ。

「や　やめろ……！　やめてくれッ！」

それが自分の声なのか、隣で蹲る男の声なのか、正面で苦悶の表情を浮かべる女のものなのか判らない。判らないが、それでも歌は止まなかった。変わらぬ歪な波動で恋や愛や渚や星を歌い上げる。そして、何故カイムの呼んだ冥獣がこのような破壊活動を行うのかはついぞ理解出来なかった。

気持ち良さそうに中空を乱舞する華美な衣装の少年達の向こうで、アルプーらが舞台に倒れている様子が視界に映った瞬間、キリアの意識はぼやけていった。どうも自分はアルプーが関わると必ず死を感じるなあ、などとぼんやり思いながら　。

その刹那だった。

濁音の奔流を柔らかく切り裂く、天の響きが舞い降りたのは。

少年達は途端に口を噤み、ぴたりと空中で静止したまま、曇天の彼方に佇む尖塔を睨みつける。そして口々に悪態を吐きながら、口惜しそうに唇を噛んだ。

『ああっ、またこのパターン……！』

『なにさ、自棄っぱち系のくせに！』

『空気読めよ聖女！』

『はいはい撤収、そういう契約だからね。お疲れさーん』

鳴り響く鐘の音に対してぶつぶつと罵りながら、やがて少年達はその体を風に溶かし、広場から跡形も無く消失する。後に残った村人達は、ただただ啞然とするのみで、攻撃された聴覚と脳の間を正常に取り戻す頃には、優に教会から救いの主がここに到着するまでの時間が経っていた。

「まあ、やっぱりお祭じゃないですかっ！ 皆さんぐったりするほど踊りまくったんですね、羨ましい」

この惨状を見渡し、腕を組んでじろりと隣のカイムを睨むガリーナ。

じんじんと響く脳髓の振動に揺られながら、キリアは生まれて初めてガリーナに後光が挿しているのが見えた。きっと他の村人達も同様だろう、救世主たる聖女に対して初めて尊敬の念を抱いたようだった。

「ガリー……ありがとう、お前は本当に聖女だった。聖なる女だった。救世主だった。馬鹿にして悪かった、これからはあんまり馬鹿にしないようにするよ」

「へい？」

感動の余り涙を浮かべながらガリーナの手を握るキリアは、次にくっつきと隣のカイムを睨み、

「一方こっちは悪魔め」

「……ごめん。あいつらの統率を取れなかったことは反省する。修正しとくよ」

「そうしてくれ悪魔め」

広場の惨状を前に申し訳なさそうに頂垂れるカイムを見て、ガリーナが唇を突き出す。

「なんだかよく分からないけど、そうです、反省してください。かくれんぼの最中にレディを放っとくなんて失礼です。ところで今回は何のお祭なんですか？ 皆でダンスパーティーなんて楽しそうじゃないですか」

「ああ、そうか、お前はずっと居なかったもんな。実はさ、今回は」

キリアが舞台を指し示した時、そこでは丁度、細身の執事が気絶したアルプーを蹴り起こしている所だった。執事は例の少年たちの大合障の中、素早く耳栓をした後は、騒ぎを無視して黙々と投票結果を集計していたのだ。国内執事番付に上位入賞も決して夢ではない縁の下根性である。

中年の男が呻いて体を起こすその隣では、ジスティアスが未だ蹲って丸まっていた。

「アルプー様、結果が出ましたよ。とつとご起床召してください」

「む　？　うむ、もう朝か。何やら妙な夢をみた気がするが、なかなかスッキリ爽やかな目覚めだ。さて、投票はどうなった？」

「そうやって厭な事には目を瞑り続けてきた貴方の人生にこれからも幸多からんことを。さあ、ジスティアス様も、もう歌は終わりましたよ」

床の上で小柄な体を丸めているジスティアスは、執事の言葉にも起き上がる素振りを見せない。

執事がうんざりした表情で紙片の束から顔を上げた時、バトラーが舞台の裾から現れた。「どうだった？」と尋ねる彼の声に、ジスティアスはぱつと飛び起き、きょんとした顔で大人たちの顔を交互に見上げる。

肩を竦めると、執事は両手に持った紙片を三人に示して見せた。

「五十二対五十二。真つ二つですな」

「はあ!？」

アルプーとジスティアスが身を乗り出した。

執事の示す丸とバツの書かれたそれぞれの紙は、確かに丁度五十二枚ずつあった。これではどちらが勝者が決定出来ない。これだけ大騒ぎした拳句に領主を選出することが出来ないなど、とても納得が出来ない二人は、眉を顰めて唸り始めた。

「むっ……本当に綺麗に半々だな」

「くそ、まさか勝負がつかないなんて思わなかったぞ。バトラー、なんとかしろ！」

「知らんです」

「執事、なんとかしろ！」

「わたくしも知らんです」

涼しい顔でそっぽを向く二人の黒服に対し、小娘と中年は齒噛みする。二人の領主はどうしても雌雄を決したい。彼らが、再び活気付いて談笑を始めている村人達を見下ろしながら懊悩している間に、人垣を縫って少女と青年がやって来た。

少女は董色の修道服を着て、翡翠色の視線を好奇心に輝かせながら領主達に向けている。青年に先導されて、今回の祭の主役達に会いにやって来たようだった。

「だから、今回は祭じゃなくて、この村に相応しい領主はこのお二方のうちのどちらかを選ぶものだったんだよ。君はどう思う？」

カイルがそう言いながらアルプーとジスティアスを示すと、ガリーナは驚いたように目を見開いた。

「あらまあ、そうだったんですか。でも、そんなの決まってるじゃないですか」

そう呟いて微笑み、ぼんやりと自分達を眺めている領主を指差す。「こちらの方が私の村の領主様でしょう？　とっても良い方なんですよ。私、良く知ってますもん」

カイルはガリーナを呆れたように見つめてから、小さく口の端を上げた。そしてガリーナの白い指が示す先に佇む領主に、「貴方の勝ちですよ、アルプー様」と言って頭を下げた。

「……えつ、ちょっと、ちょっと待て。なんだお前は？　投票結果は全部出たんだ、控えている！」

慌てて身を乗り出すジスティアスに、カイルは首を振る。

「残念ですが、この村で唯一投票資格があるのに、先ほどは投票が出来なかった人間がいるんです。それが彼女です。ですから彼女の

今の投票には効力があると思われるのですが、いかがでしょう？」

「そんなの納得いかん！　なんでそいつがさっき投票しなかったなんて言えるんだ？　証明してみせろ、カймスターン！」

肩をいからせて威嚇するジスティアスの青い瞳は怒りに深く輝き、小麦色の肌は僅かに上気する。彼女が唐突に現れた最後の有権者への不審と不満を顕わにするのは当然のことだった。だが、やはりカймは静かに頷き、ジスティアスの背後に立つバトラーに視線を移す。

「証明は、そちらのバトラー殿がしてくださいと思います」

バトラーは表情を変えず、素早く二度瞬きをしただけだった。そして少しの間を挟んだ後に、カймを見つめながら、小さく頷く。

「確かに、彼女は先ほど投票出来ませんでした」

「そんな……、」とジスティアスが柳眉を下げて、唇を噛んだ。

「でも、でも、おかしいじゃないか。さっきは居なかったと言うなら、どうしてこいつがアルプーだなんて判るんだ？　紹介されるところを目撃してなくちゃ、こいつがアルプーだと判る人間なんていないだろ！　例え以前からアルプーの事を知ってたとしても、以前と今じゃ豚と人間なんだから！」

「いえ、判るんですよ。彼女は」

「なんですさ！」

「だって、彼女は　ガリーナですから」

何の理由にもならない回答はどこか呆れながら、それでもどこか誇らしげに。

話の展開についていけず、ついていくことをとくに放棄しているガリーナは、「えへ」と笑って首を傾げる。啞然とその董色の少女を眺めるジスティアスが顔を真っ赤にし、再び口を開こうとした時。

「もういいでしょう、お嬢。これは正当な勝敗です。貴方の　我々の負けです」

ぼつりと呟いたバトラーの一言は、あくまでも眠たげで、あくま

でも億劫そうだった。

余興としては面白かったが、時間の有意義な使い方とは言えなかった。そんな淡白な声音で、端的な事実を告げる。

だからジスティアスは、ぷちんと切れた。

元々保つのも覚束ないか細い絹糸が、呆気なく風に攫われて曇天に溶けて消える。

拳を固く握り締め、絶望と怒りを含んだ視線で相手を見上げる。

一振りの揺らぎも見せない相手の沈着とした瞳は、ジスティアスの逆鱗を撫でるばかりだった。

「……じゃ、ガリの聖女は、手に入らないのか？」

「へい？ 私が何」

「ガリの聖女は手に入らないのか！ 私は欲しいと望んだものさえ、手に入れることが出来ないのかッ！」

眉を吊り上げてバトラーに食って掛かる。

右手は相手の襟首を掴もうとして、それが遥か上空にあるから、胸の前でやるせない拳を作った。

そしてバトラーは、「あんたの望むものとは？」と静かに返した。その瞳は寒空のような冷たささえ帯び、領主の教育者としての厳しい眼光を放っていた。

「はつきり言いましょう、お嬢の我俣にはうんざりです。こんな田舎にまでやって来て、戦争ギリギリの領土争いをする、村人を翻弄する、アルプー様を挑発する。あんたを守る為に命を賭して警備につく兵達のことを考えたことがありますか？ お嬢の我俣に、彼らは家族に二度と逢えなくなる覚悟をして臨むんですよ。それでも私は精一杯譲歩してあんたの我俣を叶えているつもりです。そうしたら今度は、勝負をして負けたから癩癪ですか。いい加減にきなさい、ジスティアスの跡目ともあろう方が」

氷点下の言葉は少女の熱を冷まし、潮のように血の気を引いてゆく。

逆鱗に触れたかと思えば水をぶっかける相手の態度は何時も通り

で、ジスティアスは何時を通り、そんな彼の一拳手一投足に怒り悲しみ喜び泣くのだ。だって他に上手い反応の仕方を知らない。少女はまだ少女であり、バトラーは何時まで経っても永遠にバトラーなのだから。

だから今、蒼褪め震えるしか術のない少女は、宝玉のような瞳にうつすらと涙を溜めた。呻くように、喉の奥で独り言ちるように、睫毛を震わせ、瞬く。

「家族？ 私は……私は二度と家族には逢えないんだ……そうさせたのはお前じゃないか。我俣くらい、これくらいの我俣くらい、良いじゃないか」

気の毒なほどに血色を無くした小麦色の肌。夏の湿った風に吹かれる帽子の羽飾り。

舞台上の二人の周囲だけ、泡沫のように周囲のざわめきから守られている。

バトラーが僅かに眉根を寄せて口を開こうとした次の瞬間、ジスティアスが唐突に彼の胸元に頭突きをした。ぐ、と青年が呻く隙に再び顔を真っ赤にした少女が自棄になって食いかかる。こうやって怒って喚くか、或いは衆人環視の中で泣き出すしか術が無いのだ。だから領主として、よりみつともなく無い方を選ぶ。

「だってだってだって！ もうすぐ誕生日なのに、お前はなんにも買ってくれないじゃん！ 犬が欲しいと言ったら自分で買え、テストの点数が悪かったら家庭教師を倍にする、家督を継ぐ者として男物の服、お爺様は私のことを嫌ってる、もう領主なんてやってられるかばか！ お前なんかどこかの場末の年増な歌姫にうつつをぬかして散々貢いだ拳句に牛乳雑巾のように指先でつままれてポイ捨てされるがいいさ！」

バッチイよ、と叫んで羽付き帽子を憤懣と共に地面に叩きつける。バトラーは胸を擦って咳き込みながら、いかにも不満げに返した。「待ちなさいよお嬢、私は結構理想が高い」

「知るか若ハゲ　！」

次は手袋を投げ捨てる。

「馬鹿な、見なさいこの豊かな黒髪を。我が領海のワカメは近海随一と評判ですよ」

「お惣菜の話がしたいならお弁当屋さんに行つて帰ってくるな永遠に！ いや構わない、お前がジスティアス家に残れ、私が出る！ もうやだ、私はお寺に帰る！ バカ　　！！」

最後は執事の持っていた投票用紙。丸とバツの書かれた紙片が風に舞い上がり、曇り空の元で雪のように舞う中、ジスティアスは舞台を降りて控え室へと駆け込んで行つた。差し当たつての逃げ場がそこしかなかったからだ。

栗鼠のような素早さでこの場を後にしたジスティアスを、他の人間達は呆然と見送るだけだった。彼女が怒るしか術が無かつたように、彼らもこうして彼女の後姿を眺めるしか術が無かつた。

「くっ……この私にお惣菜屋に永久就職しろだど？ 入婿はやや不本意だがそれはそれで味のある人生かもしれない……」

未だ咳をしながら呟くバトラーに、アルプーが気まずそうな表情で声をかける。

「まあ、その、なんだ、子供というのは気紛れなもので、自分の視点が狭すぎることにまだ気付かんのだよ。一晚寝ればけろりとした顔でまた小生意気な小娘に戻っているだろう。気を落とすな。正々堂々と戦つて負けたことは決して屈辱ではないことを、いずれあの娘は自ずから知ることになる」

「アルプー様が他人を気遣つてらっしゃる。思つた以上に最悪です。見てください肌がこれこのように鳥肉のごとく」

「う、うるさい馬鹿執事！ 主人が勝つて領主としての尊厳を取り戻したのだから、もう少し褒めそやしたりおだてたりせんか！」

「わたくしの中でアルプー様の人間としての尊厳は地にへばりついたらまですが」

慇懃無礼な執事へ唸り声で反論するアルプーを尻目に、ガリーナがいち早く控え室へと足を向けた。平民は下がっている　と命じ

るかと思われたバトラーは、沈黙を保ったままその場から動かない。そしてそんな沈黙に対して問いかけるような瞳を向けられていることに気付いた彼は、カームに対して弁明するように呟いてみせた。

「構わない。お嬢はガリの聖女に逢いたがっていたからな。少々、時間なら謁見を許そう」

疲弊したように見える相貌は、あるいは本当に疲れていたのかも、しれない。

「バトラー殿、選挙の結果はこれで確定なんですね？」

「そうだろうな、」と嘆息混じりに言う。壁にもたれかかり、村人やアルプーらの騒々しい声を子守唄にするように瞼を閉じると、相変わらず億劫そうに宣言した。

「第一回領主選挙の勝者は、アルプー様だ。この村は以前同様、オルドラン州に属する」

ノックをしても返事が無かったので、ガリーナは「失礼しまあす」と小さな声で断ってから、そろそろと控え室の中へと足を踏み入れた。中央に置かれたテーブルの上には沢山の菓子が積み上げられ、子供を魅惑する甘い芳香を放っている。

あまり広くない室内を見渡し、探しものが一番隅っこで備品のブランケットを頭から被って座り込んでいるのを見つけた時、ガリーナは小さく笑って飴色の菓子をひとつ手に取った。

そっと少女の隣に座る。相手は何も言わず、膝に顔を埋めたままだった。

やがてガリーナの事をちらりと一瞥し、鼻をすすって再び顔を伏せる。彼女に差し出そうとした菓子が宙ぶらりんとなり、ガリーナは仕方なくそれを自分の口に入れた。

ぽりぽりと軽く咀嚼する音だけが響き、それに耐えかねたジスティアスが顔を跳ね上げる。

「……もうッ！ なんなのお前！ お前の所為で何もかもパアになっただけだから！」

「そ、そうなんですか？ ごめんなさい、そんな事とは露知らず……えっと、ところで、何がパアに」

「もう最悪だ。家出する。決めた。もう絶対帰らない、絶対」

それだけ言うとは再度顔を埋めて沈黙する。ガリーナも沈黙を守った。

暫くすると、小さな声でジスティアスが言葉を紡ぎ始めた。

「私、本当はジスティアス家とは関係ない寺で、孤児として育てられてたんだ」

まるで懺悔の様な告白だった。少なくとも、貴族が平民に打ち明ける類ではない、深い秘密の告白。鬱屈された心情の吐露。「あいつが私を迎えに来るまで、自分が貴族の血を引いてるなんて知りも

しなかった。想像出来るか？　それまで泥まみれになって友達と暴れまわってたのが、ある日を境に、大理石の宮殿で知識と教養を教えられるようになったんだ」

ガリーナは黙って聞いている。相手が言葉を返さないことに安堵したのか、小さく鼻をすすって、ジスティアスは続けた。

「すぐく頑張ってるつもりなんだ、それでも。ジスティアスなんだから、高貴なるものの義務を果たすために一所懸命勉強して、領主らしい人間になって、みんなの期待に応えなきゃって。でも、でも。お父様は死んで、お母様も死んで、お爺様は私の事を嫌って、バトラーは冷血漢で、使用人も兵も口をきくことを許されてなくて、他の貴族達は腹の探りあいばかりで心が狭くて……私、すぐく、すぐく　帰りたいんだ」

前領主の祖父は常に彼女を冷徹な瞳で見る。

息子がどこかのつまらない平民の女に産ませた娘。彼の目はそうジスティアスを責めていた。祖父が彼女の名前を呼んだ事は一度だつて無い。どれだけ彼女が努力しても、決して呼ぶ事は無い。お前娘、あれ。それが祖父にとっての、ジスティアスの名前だった。

それでも、何時かは認めてくれると信じて、不器用なりに努力し続けた。今の今まで。

「……寺にはお前よりもっと暗い色の服を着た教会の先生達がいて、毎日大騒ぎだったんだ。みんな先生の前では綺麗な言葉を使ってたけど、こっそり影では町の大人の真似をして悪い言葉を使ってみたりした。泥団子を本気で食べて泣いた子もいたし、殴り合って鼻血を出したこともあったし、雨がお風呂の代わりにならないか皆で試したこともあった。すぐく下品で、教養が無くて、品も無くて、貧しい生活だったけど、楽しかったんだ。毎日が、楽しくて仕方なかった」

今は決して許されない、失われた理想郷。

富にどれだけの価値があるんだ、とジスティアスは良く考えるようになった。美味しいものが食べられても、楽しくなければ、そこ

に価値は無いのだと。

バトラーは彼女を叱り付ける為の存在だ。自分の仕事を全うする為の対象であり、任務の一環、大事な商品、それが彼にとってのジスティアス。彼女の気持ちなど、彼にとってはどうでも良いのだ。強いて言えば文句を言わなくなる様に成長する事が望ましいのだから。

「館に来てからは、昔の友達皆が私を見るとかしく。誰もが私をジスティアスとしてしか見てくれない。ジスティアスとしての私でなければ意味が無いから。……誰も私を、本当の名前で……呼んでくれない……」

そつとガリーナが少女の肩に手を置いた。

びくりと震えるジスティアスは、視線を隣に向け、吃驚するほど真剣で優しい翠色の瞳と真正面からぶつかる。

そんな事はありません、と少し年上の翠の目の少女が言った。

「貴方はとても素敵な方です。ですから必ず、貴方の事を心から思い遣ってくれる方がいます。貴方が気付かないだけです」

反射的に肩に乗せられた白い手を払い落とす。

適当な言葉など欲しくない。慰めなどいらぬ。もう心は決まってる。ぼろぼろになるまで働き続けた心は、もう既に叫んでいる。

「気休めなんか言っくな！ 私の事を何も知らない癖に！ もうイヤだ、ジスティアスなんか、生まれた時からジスティアスとしての価値しか無かった私なんか、無くなっちゃえば良いんだ！」

その時、ジスティアスの絶叫の向うで、遠い喧騒を聞いた気がした。

喧騒はやがて悲鳴に変わる。その不快な遠い音響にガリーナは眉を顰め、再びジスティアスの肩に手を置いた。

+

突然悲鳴が上がったのは、祭会場から離れた路の方からだった。

なんだア、とマールブルが不安げな顔で祭会場の舞台下から首を伸ばした時、小鹿のような細い足の少年が文字通り飛んで来た。ガリィナの鐘の音が封じたはずだったから、舞台に立っていたカイムは驚いて少年を見上げる。少年の体は殆ど透明で、消え入る寸前の陽炎のようだった。

何かを伝える為に必死で来た　それは彼の発した第一声で理解出来た。

『自棄つぱち系、臆病者がこっちに来る！　あいつら穴から潜り込んでんだ！』

慌てふためきながらもくるくる回転する事を忘れない少年に多少苛立ちながらも、カイムは眉を顰めた。その言葉が信じられなかったからだ。

「なんだって？　お前らの同族か？」

『そんな訳無いだろ、僕ら臆病者フレイントハートはあんな邪悪じゃない！　やばいよ、逃げた方がいい！　沢山の命の匂いを嗅ぎ付けて、嫉妬に狂ってる！！』

「そんな馬鹿な、まさか」

ありえない、と呟き、カイムは色を失くす。

そして唐突にバトラーに歩み寄ると、その襟首を掴み上げ、叫んだ。

「貴方は一体何を召喚したんだ！　何が目的で！」

「……貴族が好む観賞用の無害な小さい冥獣だ、既に捕獲し宿に確保してある。呼んだらすぐ術式は閉じた。私が呼んだのはそれ一匹だ！」

「くそっ」

青年はバトラーを突き放し、唇を噛んだ。祭会場に異様な動揺が駆け抜ける。

何か、良くないものがこちらへやって来る。

不吉な空気に誰もが顔を見合わせた時、カイムは舞台上から村人達に向けて叫んだ。

「急いでここから逃げて、家から出るな！ 冥界の住人が来る！
マール、急がせろ！ 執事殿、バトラー殿、何でもいいから術を
紡ぎ上げる。あいつの注意をこちらへ向けるんだ！」

一瞬の沈黙が場を支配する。

けれど、それはすぐさま破られた。

会場の入り口に立てられた看板の向うから、黒い何かが顔を出し
たのだ。黒く大きく、おぞましい何かが。

刹那、全ての村人が悲鳴を上げながら逃げ惑い、そのおぞましい
ものから離れようと駆け出す。親は子供を抱え、青年は老人の手を
引き、顔に恐怖を貼り付けながら、我先にと遁走する。

遠目に、キリアが母親に腕を掴まれて引き摺られて会場を出て行
くのが見えた。

蜘蛛の子を散らすような彼らを悠然と眺めながら、その冥界の住
人は肢体の全容を現した。

執事がうるんな目でそれを一瞥し、ぽつりと呟く。

「あれは何なのですか、カймスターン殿。貴方はあれと戦った事
があるのですか？」

「そんな訳あるもんですか！ 冥界にしか居ない連中ですよ。だか
らこれが初戦です」

やっぱり我々は戦うのか、と呻くバトラーを睥睨し、カймはや
って来た敵に視線を戻した。

頬に空からの水滴が落ちた。

「あいつは冥界の幽霊、何一つ益の無い害虫のようなものです。冥
界と人界は自由に行き来が出来ないから、普通は冥界からこっちは
来ない。ただし、召喚魔術などで冥獣を召喚した際、それにくっ
ついてやって来る事も無くは無いと聞きました」

「……私の所為か」

「今はどうでもいい。あいつを倒す事に集中してください。あいつ
は弱い者を食いたがる」

大人の頭程もある背丈、二トーマス程の胴。手足は多く、その長

さがどれも均一ではない。曲がっていたり、伸びていたり、途切れていた。漆黒の身体はまるで汚泥のように濁っている。腐った川魚の鱗のようだ。

それは、狂った巨大な飛蝗のような姿をしていた。

「冥府の星に還る勇氣の無い、臆病者^{ナーバスネリイ}。とかく命に嫉妬しているあの害虫を、ヒトに殺せるかどうかは」

分かりませんけど。

最後の一言は余計だったかもしれない。執事とバトラーは顔を見合わせ、視線で共闘を約束する。勝負事にするにしては、どうも生命が脅かされそうな気がしたからだ。

そして、間もなくそれは確信に変わる。

「何だあれは！ 新種の虫か！？」

「話聞いてましたか、アルプー様」

「いいや！」

執事は今回ばかりは主人を蹴り倒さなかった。残念ながら、それどころではない。

巨大な黒い飛蝗のようなそれは、粘着質な粘土で出来たような足を蠢かせながら祭会場へと這い入って来た。それは余りに禍々しい姿だった。例えば古い墓を百掘り返して出てきた物を繋ぎ合わせたような、百年の妬み怨みを捏ね上げたような この村には不釣合いな生物だった。否、代物だった。

それに命が備わっていない事は、誰もが直感的に理解出来た。

飛蝗がテールを薙ぎ倒し、皿を破壊しながら、逃げ惑う人を追う。まるで自分に備わらないものを求め、相手から奪い取ろうとするかのよう。冥魔術遣い達はまだ魔術を編み上げている。そしてナーバスネリイは一番間近に居た老人に向けて歪な腕を伸ばし、掴み取ろうとして 銀の矢に射抜かれた。

アルプーは銀と青玉でつくろわれた弓を番え、唾棄するように叫

んだ。

「貴様、我が領土の資源を何と心得る！ 公共の物を破壊するなど不届き千万、神が許してもこの領主アルプーの財布の紐が許さん！」

続けて一矢、もう一矢。煌く矢は一筋の光芒となって、降り始めた雨の合間を縫い、冥界の飛蝗の体に突き刺さる。しかしナーバスネリイはそれに対し、アルプーに一瞥を投げただけだった。

「ちつ、30万の損失だ……いや、これで40万！ 幾らでもくれてやるわ略奪者め！」

四本目の矢が飛蝗の頭部に突き刺さり、ついに敵は完全にアルプーへと興味を移す。腰を抜かし動けない老人を捨て、黒い頭部を領主へと向ける。秋の収穫を待つ赤豆がその莢を割って体を覗かせるように、十数個の赤い眼が頭皮を剥いて現れた。

次の瞬間、凄まじい速さで舞台目掛けて駆け出す。それは誰もが怯む程の、まるで空を滑る燕のような速さだった。

その巨体がアルプーに激突する直前、カイムの風の魔術が発生し、執事の氷の壁が生まれる。

突風がナーバスネリイの体を押し返し、突進の軌道が逸れる。その先で執事の作り出した大きな鏡台のような氷に激突し、氷の塊ごと舞台の脇へと吹き飛んだ。

二人の攻撃をともに受けたナーバスネリイは壁をも突き破り、大きな地響きと共に姿を消す。

「お嬢ッ……！」

その先が控え室である事に気づき、バトラーが血相を変えて飛び出した。

四人が控え室の中へ踏み込むのと、少女の悲鳴が上がるのは、殆ど同時だった。

控え室の薄い壁は吹っ飛び、隕石が墜落したような様相を呈している。その最奥で、ガリーナとジスティアスが怯えたように小さくなって飛蝗と直面していた。聖女は領主を守るように抱きかかえ、必死で相手の沢山の瞳を睨みつける。弱みを見せたら負けだと言わ

んばかりの気迫だったが、ナーバスネリイには効くはずも無かった。
「貴様、我が領土の特産品までも手にかける気かッ！」

「止みなさいアルプー様、彼女達に当たったらどうするつもりなんです！ わたくしが呼ぶまで引ッ込んでなさい！」

真ッ赤な顔で弓を番えなおすアルプーを外へ蹴り出す執事。

その合間にもカイクが風の魔術で攻撃をするが、直線上に少女達がいる為、全力で撃てない。相手の足の一本を引き千切る程度で、彼の風は消えていった。飛蝗は背後からの攻撃には全く関心を示さず、二人の少女に向かって手を伸ばす。

少女の命を、奪う為に。

「くそ、タイマンだったら勝てるのに……！」

村を吹ッ飛ばす程の嵐を巻き起こす事など、カイクにとっては容易い事だった。しかし、彼は戦い方について殆ど全くと言って良いほど無知だった。状況に最も適した戦法を習得していない。それくらい簡単に、単純に、これまでに魔術を使っていた。

「母さんに教わっておけばよかった、」と呻きながら、手近にあった椅子を掴み上げてナーバスネリイの体に打ち付ける。人間を殴ったような感触が掌に伝わり、椅子が半壊した。その傷痕からは黒い泥が溢れるが、それで終わりだった。微々たるダメージも与えていないようだった。

「なんですか、この変な方は！ 変態さんですか！」

ガリーナがジスティアスを抱えてじりじりと壁沿いを移動しながら、掠れた声で叫ぶ。ジスティアスは声も出ない。ただその大きな青い瞳を見開き、相手の発する赤い複数の光を映している。

執事の氷の飛礫がナーバスネリイの腹部を襲い、その肉のようなものを抉り取る。どぼどぼと泥水が溢れ出し、やがて止まった。執事が珍しく眉を顰める。「執事としての自信が無くなりますね、全
く」

その時、バトラーがカイクの腕を掴み、小さな紙を差し出した。親指の先を千切り、その血で描かれたゾルデア式の魔方陣だ。

「これで武器を包め、強度が倍増する。頼んだぞ」

そう言うや否や、ナーバスネリイの脇をすり抜けて少女達の元へと駆け出す。

「バトラー!!」

手を差し出すジスティアスの悲痛な叫び声。それが消える直前、飛蝗の足が跳ねた。ばねの様に斜め上へと振り切った腕はバトラーの胸を捕らえ、彼の指先がジスティアスに届く前に凄まじい勢いで後方へと弾き返される。

カームは新たな椅子を持ち、その足を魔方阵の紙で包んで、敵への殴打を再開する。視界の隅で横臥したバトラーが血を吐くのが見えた。

畜生、何て無力なんだ、俺は!!

二本目の足を潰した所で、必死に目を凝らす。香りを凝視する。鼻腔から侵入し、眼窩の底に沈殿する相手の色を見定めようとする。

駄目だ。見えない。何も解らない!

雨が激しさを増す。屋根から零れる雨水が体を濡らす。絶望に体を蝕まれながら、ただ彼は、黒い醜悪な冥界の飛蝗が少女達へとジスティアスへと手を伸ばすのを見た。

悲鳴を上げながらその腕へと十連撃を繰り出すガリーナを撥ね退け、ついに漆黒の腕はジスティアスを捕らえる。

「離せッ! 離せよ、やだああ!!」

泣き叫ぶ少女。

降り注ぐ豪雨。

目を据わらせて前へ出る執事。

絶望する自分。

「なんですか……」

床に倒れたガリーナが、頬を涙で濡らしながらナーバスネリイを見上げる。

「なんでこの人、黒いのに、赤いのに、こんなに白いんですか!?!」
え。

カームは椅子を振り上げたまま手を止めた。

驚愕の相貌でガリーナを見下ろす。なんでこんなに、白い？
見えるのか？

この少女には、色が見えるのか！？

「合障団！！」

空中に向けて叫ぶ。

見えるのだ、この少女には。何故ならば彼女は、聖女だから。ヒトでは無い存在だから。

怯えた表情で天井から顔を出す毛深い顔の少年へ向けて、カームは確信に満ちた怒号を発した。

「キリアを呼べ！！」

漆黒に飲まれながら、ジスティアスは心の隅に安堵感が広がる事にぼんやりと疑問を覚えた。友達が欲しくて、話し相手が欲しくて、似た立場の子に逢いたくて、そしてあの派手な髪色の迷子が身振り手振りで語った聖女の話がとても面白くて、聖女自身に興味が湧いてでも他人の領土にのこのこ直接逢いに行ったらバトラーに叱られるから、領地争いに乗じて聖女ごと手に入れようとして。その為にこんな辺鄙な村まで来て、結局領土も手に入れられず聖女にも逢えず、そして命を失おうとしている。

こんな無駄死に、滅多に無い。

それなのに、何故こんなにもほっとしているんだろう？

（終われるからかなあ）

多分、全ての願いや望み、苦しみや悲しみが命に確執しているからだ。

逢いたい、逢えない、帰りたい、帰れない、寂しい、辛い、愛されたい、愛されない。

死んでしまえば、楽しい想いを失う代わりに、それらの苦痛を手放す事が出来る。どうせ富にあかせて幸福を売った貴族の生活になど、価値は無いのだ。今ここで手放した処で惜しくは無い。

だから安堵があるのだ。全ておしまいに出来るという、とてつもない安堵が。

（ああ、疲れた。ほんと疲れた。毎日絵を描いて歌を歌って新しい機械の事を考えたかった。領主なんて厭で厭で仕方なかった）

でも、今ここで死んじやったら、バトラーがお祖父様に物凄く叱られるかな。ちょっとだけ悪い事したかな。

それでも終焉の安息の前では、小さな罪悪感など消えてしまう。闇はどんどん深くなってゆく。ジスティアスは緩く目を閉じて、沈み込むように落ちていった。

その、浮遊する落下の狭間で。

ふと小さな灯火のように、心に思い点いた事があった。

(……あれ?)

薄く目を開けようとする。けれどももう無理だった。

(厭だつて事は毎日バトラーに言つてたけど、私が本当にしたい事
つて、ちゃんと言つた事あつたっけ?)

ふっと灯火が消えた。

+

どうしてこんな事になった、とバトラーは絶望と酸欠で茫洋とする頭で考えた。

お嬢の我侭はいつもの事だ。あれが厭だ、これが厭だ、かと思えば良い事を思いついたと言つて突飛な行動をする。大抵はそれが領主としての行いに相応しくないものだから、自然と否定し諫める事が多い。それが彼女の不満になっていることは知っている。

だが、彼女が本当に求めている望みというものが、どうしても解らない。

寺に帰るのは無理だ。既に彼女は領主ジスティアスなのだから。勉強をしないのも無理だ。既に彼女は領主ジスティアスなのだから。

教育係として叱ると、彼女はいつも不貞腐れて口を嚙む。涙目で喚く。今日ほど激しく激昂したのは初めてだ。恐らく、ずっと鬱積していたものが噴出したのだらう。身の丈に合わない事を強制される苦しみは、自分も良く理解している。

理解しているはずなのに。

くそ、私の所為だ。何もかも、最初から!

少し前に、ペットが欲しいと珍しく建設的な望みを言つた事があ
る。誕生日にペットが欲しいと。犬でも猫でも鳥でもなんでもいい
と。

部下であるバトラーから主である領主に対して贈り物など有り得ない。誕生日のプレゼントという風習は、同じ立場の者同士、或いは位の高いものが気紛れに位の低いものに下賜するものだ。そう言う、また不貞腐れて口を噤んだ。

けれど、その時気付いた。彼女はとうしようもなく寂しいのだと。バトラー以外の誰かを求めているのだと。一緒にいて、話をしてくれる誰かを。

私では無理だ、そう気付いたから、今度の誕生日にプレゼントをやる事にした。ひどく例外的な事柄だけれども。バトラーが上の者に贈るのだから、せめて貴重なものでなくては外に対して格好がつかない。何事も恥と外聞を気にする世界だから、気にしすぎて損をする事は無い。

だから、ジスティアスがこの村を領土にすると行って来たがった時、内心では千載一遇の機会だと思った。この村は、最も冥界に近いと冥魔術遣い仲間から聞いたことがあった。眉唾の聖女もどうやら嘘ではないらしい、冥獣を召喚するには一番良い場所なんじゃないかと。冥獣。存在すらあやふやで、召喚さえ困難な貴重な獣。知性を持ち、人語を解する、この世界にはいない獣。

これ以上のペットは無いと思った。

だから今朝は先遣隊として日の昇る前から一人でこちらに来て、聖女を召喚の媒介にする為に教会へ来た。もし伝説が本当なら、冥界から人界へ直接魔術を干渉させるより、緩衝材としての聖女を間に置いたほうが遥かに楽になると考えたからだだったが、正にその通りだった。幻惑の魔術符を懐に装備したら、彼女はバトラーを友人だと思い込んだ。少々奇天烈な会話を交わし、数時間その場から動かない約束を取り付け、彼女の真上にあたる教会の鐘楼に召喚の魔方陣を敷く。

そして召喚に成功したのがつい先程だった。

現れた冥獣は、自分の感覚からみたらどうとも言えないが、独特の感性を持つ彼女からしたら愛らしいものに見えるだろう獣だった。

大人しく、賢く、ペットになれと言ったらはいと答える、従順な獣を籠に入れ、部屋に置いて来た。

後は適当なところでジスティアスを諫め、さっさと引き上げれば全部終わりだった。全て滞りなく終わるはずだった。

それなのに。

（全部、私の所為だ）

ナーバスネリイ

この歪な臆病者も、彼女の激怒も、彼女の涙も、彼女の死も。

何もかも、自分の所為なのだ。

嘘を吐き続ける、残酷で愚かな人間の所為。

ああ、と息が漏れた。錆びの味がする。錆びの匂いがする。ぼんやりと浮上する意識の中、痛む身体を叱咤して立ち上がる。そうだが、身体に鞭打て。痛めつける。それでも終わらせるな。終わらせてはならない。

それが、罪を背負う者としての、絶対の決意の証であり、義務だ。

+

「ジスティアス様！！」

叫んだのは、カイクか、執事か、それとも悲鳴の聞き違いか。ぐったりと気を失った少女の体を抱え込んだナーバスネリイは、頭を擡げて半身を起こした。そして頭から胸郭であっただろうはずの曲線をごぼごぼと泡立て、底なし沼のような口を広げる。

生あるものへの嫉妬に狂った冥界の幽霊は、少女の命を喰らうつもりだった。

「止めさせる、彼女が殺される！」

魔術によって強化された椅子は鉄塊のように飛蝗の足を弾き飛ばしてゆく。絶え間ない執事の冥魔術も、その凍てつく刃で体を切り刻んでゆく。

だが、飛蝗の動きは止まらなかった。痛みなど端から消失した身体、とうに尽きた命への凄まじい執着心、それがナーバスネリイの

全てだった。

執事が鼻腔から血を流した。もう限界が近い。余りに魔術を撃ちすぎた。さすがの執事でも、これ以上魔術を使えば死んでしまうだろう。

「キリアはまだか！ 早くしろ、耽美野郎　！！」

前に回りこみ、ジスティアスを捕らえた腕を叩き折ろうとして、別の足に蹴飛ばされる。カームは壁に背中を撃ちつけ、恨みがましく敵を睨みつけた。

飛蝗が沢山の赤い眼で笑った気がした。

大きな漆黒の体で彼女を取り込み、そしてごぼりと口を閉じ、喰った。

終わりだ　。

だがその寸前、まだ外界に残っていた彼女の小麦色の細い手を掴んだ者が居た。

「バトラー殿！」

シャツを真っ赤に染めたバトラーが、刃のような瞳で敵を凝視している。掴んだジスティアスの左手の甲に、右手の親指で素早く血色の魔方阵を描く。それは、カームに渡した紙に描かれていたものと同じ図柄だった。

強度が倍増　。

しかも施術者が直接手で触れて力を注いでいる為、倍の倍ほどにはなるかもしれない。

喰われたジスティアスの延命には最適の処置だった。しかし、

「離せ、バトラー殿！ 今日何回大きな魔術を遣った？ 間違いない、もうすぐあなたは死ぬぞ！」

咳き込むように口蓋と鼻腔から血を吐き出し、膝を地面につくバトラーは、虚ろに笑った。

「勿論、だが私が死ぬのは彼女を救った後だ。早いところこいつを殺してくれ」

「その通り。曲りなりにも執事の端くれを名乗るなら死んでも離す

ものではありません。多少、見直しました」

自分の鼻血を拭き取りながら、執事が微笑む。すぐに魔術を編み上げ、敵の体を潰す為に氷を撃つ。

手に入れた命を上手く喰えずに業を煮やした冥界の幽霊が、もかくように蠢き、バトラーの体を打ち据える。足の数が減ったとは言え、今の瀕死の彼には確実な追い討ちだった。

「大丈夫です、必ずひっぱり出してみせます！」

バトラーを庇う様に彼の体に抱きつき、ガリーナがジスティアスの手を取った。脱力したただ掴むだけの彼の代わりに、少女を懸命に引き摺り出そうとする。ばしん、ばしん、と弱った足が彼女の体を打った。その一つ一つを椅子で潰しながら、カームは地面を見、愕然とした。

腹の下の方から、ごぼごぼと泥が溢れ出し、新たな足を形成している。あれだけ潰したのに、また新たに生まれようとしているのだ。

畜生、どう足掻いても殺せないじゃないか！

唇を噛んで、自分の無力さ加減に再び絶望した、その時。

「なんだよ、こいつ……」

待ち望んでいた声が聞こえてきた。

「キリア！」

耽美少年に連れてこられたキリアが、愕然とした面持ちで控え室内の惨状を凝視している。体は濡れ、寒さの為か、恐怖の為か、がくがくと四肢を震わせている。

キリア、とカームが声を張り上げた。雨に掻き消されないように、明快に、確実に、キリアに伝わるように。

「キリア、こいつは『白』だ。そして君は『金』。ルールがある、君なら知ってるだろう？ ある色はある色に弱い。こいつの白を打ち負かす可能性があるのは、この村では君の金だけなんだ！」

「ちよっと、待ってくれよ。なんだよ、色って、何の事だよ。俺にこいつを倒せつてのかよ！ 無茶だ、出来るはずない！」

「出来る！ やるんだ！」

出来ねえよ、とキリアは泣きそうな顔で地団太を踏んだ。知己の変わり果てた傷だらけの姿に怯え、竦んでしまったのだ。たった十一歳に、突然化け物と戦えと言ってもとても無理な相談だろう。カームは臍を噛んだ。

「なあ、俺の力、知ってるだろ。せいぜい石飛礫を投げる程度なんだ。兄ちゃんがそうやって椅子で殴るほうが絶対に強い。それに

」

血を吹くまで冥魔術を撃つ執事を見て、「無理だよ。絶対に出来ない。俺には倒せない。」

「ごぼごぼ、とナーバスネリイが蠢いた。ガリーナが腕ごと引っ張られ、悲鳴を上げる。ぐったりとしたバトラーは指一本も動かさない。

足が完全に再生するまで、暇は殆ど無いだろう。

「キリア」

今にも泣き出しそうな顔のキリアに向けて、ガリーナが言う。顔は飛蝗の陰になって見えない。

「出来ます」

「むちゃくちゃ言うな、俺の冥魔術なんて何も知らない癖に！ 無理なものは無理なんだよ！」

「知っています。私は、キリアがこの変態さんを倒す事が出来るのを、ちゃんと知っています」

キリアが顔を朱に染めた。水滴がとめどなく頭から顎へと落ちる。恐怖の代わりに、理不尽な怒りが沸いてきた。大人なんだから、子供に押し付けるんじゃないやねえよ　そう叫ぼうとした時だった。

「剣です」

「……え？」

「貴方は、冥魔術で作った剣を使って、ばっさり斬ります。絶対に出来ます。ちゃんと知ってるんです、私は」

「お前、いい加減に……！」

剣？

冥魔術で作った、剣？

そんなもの聞いたことも無い。けれど、例えば全ての属性持ちが、剣を作るとして。最も相応しいのは 俺だ。金である俺。

胸元をまさぐる。ノミが出てきた。短刀に近い長さの、ジスティアスに放り投げられたノミ。

「キリア、これでそれを」

カイムが水で濡れた魔方陣の紙を寄越した。キリアはそれをおずおずとノミに巻き、片手で構える。

じつと見つめると、普段の倍の力が湧いてくるのが解った。ゾルデア式はオロー式を補助する。教科書の文面が脳裏に浮かんた。

少年は手足の震えを止め、その場に居る大人達に視線を巡らせた。椅子で化け物を殴打するカイムスタン、鼻血を出しながら氷を撃つ執事、ぐったりしたバトラー、それを庇うガリーナ、 化け物の中から伸びる小麦色の手。

「分かったよ」

今、自分がやらなければ、皆が死ぬ。分かったよ。やってやる、やってみせる。

すつと目を閉じ、ノミを握った右手を前に突き出す。脳裏に金色の煌きが瞬き、舞い降りる雪のように一面に広がる。その輝きを少しずつ集め、一本の細長い糸へと縋り集める。ガリーナの紡ぎ糸のように。

そしてこの世で一番、この場この時自分が発するに相応しい、冴えた呪文を探す。

目を開き、キリアは黒い歪な泥の化け物に向かって駆け出した。とん、と左足を軸に宙に飛び出すと、驚くほど高く舞い上がる。カィムが風で補助してくれたのだ。

そしてノミを下に向けて振り下ろしながら、咆哮した。

「大人は皆勝手だ ツー!!」

眩い金色の光が弾け、金剛石に似た冥魔術の剣が、泥水の飛蝗を

両断する。

突然、落下が止まった。乱暴な力で腕を掴まれる。引き摺り上げようとするその無粋な手を払いのけようとしても、手はジスティアスを逃そうとしない。

（なんだよ、私はもう落ちるんだ。そつとしといてくれ！）

苛立ち、噛み付いてやろうかと思った時に、微かな声が聞こえた。

ウナ

行かな でく

あ て んだ

（……え？）

急激に光が広がった。

+

それはまるで、黄昏に去り行く夕陽を見送る儀式のようだった。

この世界に居てはならない存在は、キリアの剣を受け、全身を蠕動させた。真つ二つに斬られた体は戦慄き、震え、声にならない無念の絶叫を上げ、そして金色の光を放って宙へと溶けていった。後には夏の夕立と、傷ついた四人の大人と、二人の子供だけが残った。

「や、った……？」

キリアが呆然と呟く。カン、と硬い音を立ててノミが地面に落ちた。

「ああ、やったんだよ。君が倒したんだ。冥界の化け物を！」

料理人が椅子を放り投げ、キリアに駆け寄る。少年の両頬を掴み、その額にキスをした。そして振り返り、柔らかくなった雨音に曝される四人に視線を戻した。

ジスティアスは地面に蹲って丸くなり、バトラーは仰向けで倒れている。

ガリーナが少女の背中に触れ、カイムに向けて嬉しそうに顔を綻ばせた。

「大丈夫です、怪我は無さそうです。ちゃんと息もしてます！」

「ああ」

良かった、とカイムが息を吐く。けれど、冷たい声音がその安堵を打ち破った。「右腕は、もう使えませんね」

執事がバトラーの傍に膝をつき、無感動に呟いたのだ。カイムは慌ててバトラーの腕を見る。

未だジスティアスの細い手を握っている彼の右手は、真っ黒に変色していた。ナーバスネリイと似た泥のような漆黒。腐り落ちたのだ。ジスティアスが受けるはずだった攻撃を防ぐ代わりに、その力が彼の方へと逆流した。ぐずぐずと崩れ落ちてゆく右手に、カイムは唇を噛んだ。

「…………お嬢」

バトラーが微かに唇を動かす。

その瞬間、丸くなっていたジスティアスがぱつと飛び起き、寝起きのように腫れぼったい目で周囲を見回した。そして目の前で倒れている青年と、自分の左手の先に繋がれた彼の腕を見て、息を飲む。

「お嬢、怪我は？」

「え……、無い、無いよ。ねえ、バトラー、黙って。血が、手が」

「どうなって、いますか」

ジスティアスはしゃくり上げる。相手の手を握ろうとして、そしてそうする事で黒い手が崩れる事を知って、涙を零す。

「…………死んじゃうよ…………」

構わない、と青年は呟いたようだった。

最期にあんたを守れたなら、それで十分だ。

「嫌だ!!!」

少女が絶叫する。止んだ夕立の代わりに、雨を降らせるように、

ぼたぼたと泪の雫を落としながら。

行くな。終わるな。

それは彼女に常に与えられ続けた楔。それを与えた男は、全てを置いて独りで逝くつもりだった。

そんな勝手なこと、絶対に許さない。

「私を二度もここに連れて来たのは、お前じゃないか！ 責任とれ、逃げるな！ ずっと私の傍にいろ！ 私を誰だと思ってる、領主の命令だぞ！」

バトラーは目を伏せたまま、僅かに顔を歪ませた。微笑むように、苦悩するように、泣き喚く少女の言葉に息を吐く。手首から下が崩れて床に落ちた。命の灯火を翳るように。

「どいてください、ジスティアス様。その人を助ける」

何時の間にか少女の後ろに立っていたカイムが、無感情な言葉を落とす。その瞳は決意の黒い光に満ちていた。

少女は料理人を見上げ、そして頬を拭いながらバトラーから離れた。震える肩を抱き、所在無げに呆然と佇む。

カイムは瀕死の青年の耳元に唇を寄せると、彼にしか聞こえない、それでいて毅然とした響きで囁いた。

「貴方に治癒の呪いを与える。その代償は、貴方が幸の象徴であると無意識下で考えるもの」

そして少し目を閉じ、微かに首を振る。

「貴方は彼女に、真実を話してはならない。その代わり、今は死を免れる事が出来る。良いですか？」

バトラーは今度こそ口を三日月に形作った。

残酷だな。元よりそのつもりだったが、確実に逃げ道が無くなるじゃないか。

「やさしい、呪いだな」

「そうとも言えませんよ。解ってるでしょう」

ああ、解ってるとも。

「……お嬢を」

言えなくなる前に、言っておかなければならない事がある。全てではない。ほんの一部を。

カイルが頷くと、ジスティアスがバトラーを覗き込んできた。大きな目は涙で潤んでいる。顔をくしゃくしゃにして、青年の額に指先を触れた。冷えた体に、小さな温点が暖かい。その温もりを頼りに、青年は目を開いた。鉄のように重い瞼は、まるで錠前の落ちた門扉のようだ。

「ウルナ」

その単語に驚いたように目を丸くする少女は、やがておずおずと頷いて返す。

「私を、許して欲しい」

「なに、が？」

「私は、あんたが思っている以上に、あんたを大切に想っているんです。もし、あんたが領主を本当に辞めたいなら、私は全力でそれを叶えたい」

「……どうやって？」

「一番、簡単なのは。権利を委譲するんです。例えば、身内に」

「身内って、お祖父様はもうご高齢だよ。他に身内なんて居ないです。ですから、とバトラーは大きく息をつき、掠れ声で続けた。

「私と、結婚するんです。そうすれば、全て、上手くいく。あんたは富だけ得て、義務を放棄することも、出来る」

ジスティアスはじつとバトラーの目を覗き込んでいたが、やがて泣きながらでカイルを見た。

「まずいよ、傷が頭まで届いてるみたいだ。こんな冗談言う奴じゃなかったのに」

「ウルナ」

「やだよやだよ、死なないですよ！ お前が死んだら私本当に領主辞めるからな！ ちゃんと良い子にするから、元気出してよ！ こんなお前なんて、見たくないよ」

べそをかく少女に、バトラーは再び大きく深呼吸すると、薄く目

を閉じた。そして消え入る寝言のように、小さな声で最後にこう言った。「帰ったら、ちゃんと、聞かせて下さい。あんたが心から望む事を」

「カイルスターン！」

大丈夫、とカイルは両手を彼の額と胸にあてて呟いた。「眠っただけです。すぐ、治ります」

カイルの手から、黒い蛍のような光が湧き上がる。光はやがてバトラーの全身を包み、土に染み入るように消えていった。後には傷一つ無い青年の眠る姿が現れる。崩れ落ちたはずの黒い腕は、それよりも黒い夜空の光に編み上げられ、再び元の姿を取り戻した。

治癒の呪いが完成したのだ。

「心から望む事、」ジスティアスは深い眠りにつく青年の髪を撫でながら、目をごしごしと擦った。

おやつをもつと食べたいとか、沢山寝たいとか、絵を描きたいとか、歌を歌いたいとか、帰りたいとか、海に行きたいとか、演劇を見たいとか、名前と呼んで欲しいとか、本名を知りたいとか。

でも、とりあえずは。

青空の中の積乱雲を見上げながら、ジスティアスは微かに笑った。「抱っこして欲しいな。お父さんみたいに。逢った事ないけど」そしてカイルと目が合い、頬を赤く染めてそっぽを向く。カイルは座り込んだまま微笑んだ。本当は笑う気にすらならなかったのだけれど。

全く、なんでもつとはつきり言わないんだ？

呪いが発動してしまった後は、チャンスはもう二度とないのに。どうしようもなく面倒臭い人種だ。

領主という人間は。

貴方は何でも出来るのですね、と執事が呆れ口調で呟くのが聞こえた。そうでもない。何事も結果を得る為には犠牲が必要だ。時に

は、結果すら凌駕するほどの、残酷な犠牲を。

+

その日、村は一日中大騒ぎだった。

冥界から見たことも無い獣が（「いや冥界からかどうかはよく解らないけど、というか冥界なんて信じてないし、とりあえず悪い害獣」とその日の村内会書記の日記に記された）やって来て、村人を襲い始めたのだ。長い村の歴史の中で、こんな凶事は少なくとも文面では記録に残っていない。ところがもつと驚いた事に、この害獣を、二人の領主と聖女が力をあわせて打ち払ったのだ。しかも止めを刺したのは少年キリアであるという。

結局　祭は加速する事になった。

アルプー領主と、隣地のジスティアス領主、そして聖女とキリアに対する第一回感謝祭は、妙な実感を伴いながら先ほどよりも遙かに大きいものとなり、結局なし崩し的に二日連続開催が決定となった。

主人公である連中は、くたびれ果てて伏せていた為、出席する事が出来なかったのだが。

カイムの屋敷である臨時宿屋でごろごろしていた兵達を至急呼び寄せ、領主達を運ばせた後、カイムは愕然と佇む事になる。部屋が無かったのだ。全て二つの領土の主達ご一行様で満室となり、彼自身の休む部屋がどこにも無い。ロビーも物置も、あぶれた兵が寂しそうに蹲っている。

「どうしよう……どうしてこんな事に……」

改築したばかりの豪華なステアケースを見上げて途方に暮れた。

今寝ないと流石に死ぬ自信がある。冥魔術も沢山使った上に、禁忌として自ら封じていた呪いまで使用したのだ。

しかし、あてにしていた九里金豚もバーババ亭も大忙しだ。彼の横になる隙などありはしない。屋外も無理だ、先ほどの雨で地面

がぐずついている。参った。絶体絶命だった。

「あの〜」

「うわっ」

突然背後から声をかけられ、カームは飛び上がった。

振り向くと、董色の聖服を泥まみれにした聖女が、指先をもじもじと弄りながら上目遣いに彼を見上げていた。

「部屋、無いんですよ」

「え、ああ…… 占領されちゃった」

「ついてきてください」

「え？」

ガリーナはそう言い置くや否や、くるりと踵を返して早足で歩き出す。訳も分からないまま、カームは取り敢えず少女を追う事にした。

空はすっかり夏の快晴で、西の方がやや紫色に色付き始めている。ガリーナの服の色彩によく似ている。ぬかるんだ道を音を鳴らして歩き続けると、景色には段々と深い緑が増え、やがて常緑樹の茂る小さな森へと入った。

「ごめんなさい」

ガリーナが呟いた。カームは彼女の謝る理由が解らなかったのが、と返す。

「さっきの人、多分冥界から来たんだって皆言ってます。きっと私の所為です。私がかくれんぼにかまけて、鐘を鳴らすのが遅れたから 私の所為で、皆さんが酷い目に」

「違うよ！」

青年は思わず声を上げる。彼は、ナーバスネリイ襲来を理由を誰にも話していなかった。バトラーの召喚がきっかけで不運にも奴の侵入を許した所為だが、それを言えばガレナ州領主ジスティアスの責を問われないはずは無い。公表するのが当然の行動なのだが、カームにはどうしてもそれが出来なかった。したくなかったのだ。

「君は良くやってる。あれは本当にアクシデントだったんだ、君の

ミスなんかじゃない。寧ろ、君がいなかったら倒せなかったんだ。君はあいつの星来の色を見抜いたから」

「せいらいのいろ？ 白の事ですか？」

「そう。普通の人間には見えないはずだ。見る必要が無いから。君のお陰で、白を打ち消す金のキリアを呼べばいいと分かった。本当に感謝してる」

ガリーナは頬に手を当て、少し俯いた。

「よく、覚えていません……何か変なことを口走ったとは思ったんですが。でも、皆さん普通に見えるものだと思います。世界は色に満ちてます」

世界は色に満ちている。

その言葉をヒトから聞くとは思わなかった。矢張りこの少女は、聖女だ。眉唾でもなく、伝説でもなく、真実の聖女。例え周囲の誰もが信じていないとしても。

「カイルさんは、黒ですね」

「そうだよ。風の黒」

「執事さんは青で、キリアが黄色で、バトラーさんは……ちょっと見辛いけど、緑かな。不思議です。冥魔術遣いさんは、他の方よりも輝いてます」

それは人界では属性と呼ぶ。金属、風属、水属、火属など、これらは人には決して色で見えるものではないからだ。それを色で識別し、生まれ持った『星来の色』と呼ぶのは、冥界の者だ。風属を黒と、水属を白と呼ぶのは、この大地の遥か下に棲む者だ。

「カイルさん、普通の人じゃないから、そんなに落ち込んでるんですか？」

「」

カイルは苦笑した。頬を撫でる古木の葉を一枚、通りすがりに引き千切る。

どうしてこの子には、解るんだろう。

絶対に二度と使つまいと決めていた呪いの冥魔術。人命を助ける

為とは言え、それを使用した事は決して彼の心にとって易い事ではない。呪いは所詮、人を幸福には出来ないと知っているからだ。だが決定的な不幸にもしない。本当に、忌まわしい力だと思う。

「お揃いですね。私も一応、人じゃないって事になってます。なんせ聖女ですから、えへへ」

何故か嬉しそうに笑いながら、ガリーナは小走りで目の前に現れた建物の扉に手をかけた。それは古い教会、ガリーナの居住の場。本日三度目の再来となったカームは、半ば混乱気味に首を傾げた。

皆さんには内緒ですからね、と言って、ガリーナは扉を勢い良く開けた。そして満面の笑みで両手を広げる。

「お泊まりさん一名様いらっしゃーい！」

……………。

「へ？」

族趣味は、今も続いているんですね」

「ああ……ウルナが生きている限り、永遠に」

「俺は最初、貴方が彼女の父親ではないかと思ったんですが、振られた所を見るとそうではありませんね」

「やっぱり振られたのか、私は」

「お気の毒に」

「うるさい」

「すみません」

「……私は、冥魔術に耽ってしまつてね。子供の頃からこれ一筋だった。召喚も得意だったし、貴族連中に冥獣をやる事もあった。とにかく、もつと冥魔術で遊びたかつたし、学びたかつた。その為にはどうしてもロードという身分が邪魔だった。足枷を嵌められたまま海に放り込まれる気分だったよ、当時の私は。こんなジステ

ィアスの恥曝しは当然ながら勘当状態で、貴族の世界では死んだ事にされていたから、そのまま上手くいくと思つた。好きな事だけをやって生きていけると。ところが、父が他に子を作らなかつた故に起きたお家騒動、お前も知ってるだろう？ 再び私に白羽の矢が立った。当然だな、実子なのだから。それでもどうしても私は厭だった。だから、身代わりを立てた」

「世間的に死んだ貴方という立場はそのまま、隠し子がいたというアプローチをしたんですね」

「そうだ。孤児院から何も知らない貧しい子供を引っ張ってきて、立場も富も与えるんだからお互いにとって悪い話じゃないと信じてたんだ。信じられない愚か者だろう？ それが私、アイスグラント

「ガレナ」ノム「ジスティアスだ」

「彼女に白羽の矢を立てたのは何故です？」

「さあね、良く分からない。ただ 教会を覗いた時、まだ幼かつ

た彼女が豪華な天井を見上げながら、懸命に絵を描いていたんだ。ステンドグラスでも描いているのかと思ったら、彼女は教会の設計図を描いていたんだよ。内側から見上げて、模写するみたいに、建物の設計図を。凄く面白い、と思った。この子はある種の天才だと多分それだけの理由だ。次の日、彼女はジスティアス家の嫡子として迎え上げられた。私もそのまま、面白い面白いだけで生きてゆければ良かったんだがね。父がそれを許さなかった」

「貴方をバトラーとして置いた？」

「そう。父は放任主義だったが、愚か者には制裁を与える。自分のしている事を、しっかりと見据えろ。そう言いたかったんだろう。言いつけ通り、渋々ながら彼女の教育係になってしまった私は、時がたつにつれ自分のした事の恐ろしさにただ怯えるばかりになった。自分の役目は彼女の厳格な教育係だと信じることで、どうにか平静を保っているがね。それでも毎晩、うまく眠れないんだ。……なあ、想像してみろ」

「……」

「愛する人が、自分の幼かった欲望の為に人生を狂わされ、何も知らず懸命に役割を果たそうと努力し、それが上手く出来ず苦しむ姿を。そして自分は彼女に憎まれ疎まれる存在だという事を」

「……」

「私がウルナを愛してしまった事は、利己主義だった過去の私への罰だ」

「執事殿が握っていた貴方の弱みとは、この事だったんですね」

「あいつは本当に勘のいい人間でな。野心を抱くような人間でなくて助かっているよ。自分の中の変なポリシーだけに忠実だからな」

「貴方が握っている執事殿の弱みとは？」

「まあ……弱味とも思っていないがな、あいつは。だが取り敢えず、仁義は通す。秘密だ」

「俺の呪いは、矢張り貴方がたを不幸にするだけのようだ。かけるべきじゃなかった」

「いや、構わない。私は一生を以って償う。それに変わりはない」
「想いを、永遠に伝える事が出来ないとしても？」
「それが私の罰だ。その罰を受け続けながら、バトラーとして、彼女を必ず幸せにしてみせる。勿論、」

いつかウルナの夫になる事を視野に入れながらね。

そう呟いて、真実の領主は月明かりの下で微笑んだ。

+

昼前の青空に花火が上がる。

帰還する領主達への餞のパフォーマンスだ。一晚寝て、合障団達の密着コンサート被害から回復した兵達は、黒塗りの馬車を中心に整然と馬を並べ、出発の準備に余念が無い。

お土産に沢山の菓子や果物を抱えたジスティアスは、村人に紛れて「またきてねジスティアス様」と書かれた垂れ幕を持つガリーナの姿を見つけると、笑顔で駆け寄ってきた。赤い羽根つき帽子は、やはり銀髪と青い目に良く似合う。小麦色の肌にも。

「昨日は大変だったな！　なんだか良くわかんなかったけど、でも皆元気になったし良しでしょう。村が手に入らなかったのだけが残念だ」

「また選挙をやればいいじゃないですか。次はもつと前もって準備して、立派なお祭にしますからね！」

楽しみにしてる、と言って、ジスティアスはガリーナに顔を近づける。そして小さな声で囁いた。

「あのさ、お前さ、昨日、私の事を思ってくれる人が絶対いるって言っただろ？　あれさ、もしかしたら、ほんとにもしかしたら、本当かもしれない」

「まあ、どうしてです？」

「あのな。すごい嫌な奴が、私が前言った事を覚えてくれてんだ。誕生日プレゼント、くれたんだ。少し早いけど。それがめちゃくちゃ可愛いペットなんだよ」

ガリーナは我が事のように嬉しそうに笑い、頷く。ジスティアスはぴよんぴよん跳ねながら馬車へと戻って行った。そして途中でくるとこちらを振り向き、叫ぶ。「偉い領主になって、いつかこの村を私のものにするからな！」

「何ッ」

村の女性達から沢山の花を押し付けられて困惑していたアルプーが、歯を剥いて少女を睨んだ。

「お前が偉くなる日なんて一生来るわけ無かるうが、この田舎娘！ 帰れ帰れ、ばーか！」

「うつさい豚領主！ リバウンド期待してるぞ、ばーか！」

「執事、塩撒いとけ！ 田舎菌がうつるわ、ばーかばーか！」

「砂糖の間違いだろ、ばーかばーかばーか！」

ざばりと頭に塩を降り掛けられ、違う私じゃないあっちだ馬鹿執事ツと怒鳴るアルプーを尻目に、ジスティアスは馬車へと乗り込んでいった。

扉を閉めようとするバトラーを制し、周囲を見回す。少し離れたところで、妙にやつれた顔をしているカイムを見つけ、上機嫌に呼びかける。

「カイムスターン、お前の冥獣召喚術、大したものだな！ うちの冷血バトラーとは大違いだ。褒めてつかわす」

「は？」

「ガリーの聖女に逢いたいと言った時、バトラーが特に反対もしなかったのは、お前という腕の良い召喚魔術士がこの村にいることを知ってたからなのだな。お前の親戚の友達の少年達はちよっと、お断りしたいが……だが、あのペットは可愛い。気に入った。大事にするからな」

カイムはぼんやりと相手の顔を凝視し、そして茫洋と彼女の言葉

の意味を理解した。

そういえば、彼女はペット冥獣の召喚が誰によって行われたものか、見ていないのだ。

見たのは、カイルが少年霊を呼んで言葉を交わした所だけ。
青年は困惑に唇の端を上げ、バトラーを見た。相手は一瞬こめかみを引き攣らせ、すぐに青筋を浮かべてカイルを睨む。そして首を横に振り、人差し指を唇に持ってきた。

彼は自分が苦勞した事、努力した事を見破られるのが嫌なタイプらしい。耐えて忍ぶ、一昔前の貴族の典型的なプライドの高さだ。
ジスティアス一族は悪趣味だが、貴族精神だけは高邁のようだ。

「……お褒めに預かり、光栄です」

「うむ、今度なんかご褒美あげるね。では、帰るぞバトラー！」

はい、とバトラーが呻き、茶色の毛並みの美しい馬に乗ろうとした時、「違う」とジスティアスが憤慨した。馬車の扉を開け、自分の隣の座席を示し、

「お前はこっち！」

と喚く。

「馬じゃ寝れないだろ。そんな眠そうな顔して、こっちまで眠くなってくるよ。辛気臭いから着くまで静かに寝てろ」

「分かりました」

そして、ガレナ州組一行はゆつくりと村を後にした。

その豪華なシルエツトが大通りを抜け、草原へと消えて行った後、カイルはほっと一息ついた。これでやっと、心置きなく休めるのだ。だがそれも束の間、ガリーナが跳ねるように彼のもとへやって来る。「今日のテーマは豊作過ぎて食卓に居場所の無いハウレン草の困惑です！」

深緑色である。

カイルは少女の元気な笑顔を眺めながら、若いなあ、と心の中で呟いた。未だ頭の中が朦朧としている。一方、彼女は昨夜の興奮が冷めやらない様子だ。

昨夜、「男性を泊めるのはいけないことなんですけど、カイクさんなら良いですよね」と照れくさそうに言ったガリーナに、カイクは大いに仰天した。

ちよつと待て、まだ招かれもされた事の無い関係なんだぞ！
それがいきなりお泊まりつて、そんな節操の無い！ あ、いやでも待てよ、と言う事は少なくとも自分は執事と同列に扱われたんだ。良かった、彼女の中で俺は執事より劣る存在では無かったという事なんだ。って違う！ 益々節操が無い！ 何を考えているんだ、この娘は！

ガリーナが何を考えてカイクを泊めたかと言えば、勿論。

「昨日の王カー対決は盛り上がりましたねー！ カイクさんが聖なる水切りを唐辛子色の騎士に上乘せして、冥魔術攻撃を防ぎつつ捨て山の中から一枚手札に加えた時には笑っちゃいました。聖なる水切りは大食漢オンドル二世と王族にしか使えないのに。騎士なら同じ効果の黄昏のつけ髭ですよ。うぷぷ」

「地方ルールなんか知らないよ……」

「駄目ですーカイクさんはもうこの村の一員なんですから、ちゃんと覚えてください。執事さんとお泊まり王カー対決した時、あの方はその辺ちゃんと抜かりなくてですね、私四連敗を喫してしまいました。今度は皆でお泊まり王カー合戦しましょう！ はい、裏山のラグジュアリーを使用出来る人は？」

「怪盗ゴルゴンゾーラ、山田山荘の女傑、英雄トーマス……」

「ぴんぽーん！」

お陰様で一睡も出来ませんでした。

常に想像の斜め上を突つ走る聖女ガリーナは、その非人性ゆえに毎回空気を読まずカイクを死の縁に立たせる。断れば良いものを、何故か断れず死ぬ手前まで付き合ってしまう自分も情けない。

通りすがったキリアが、砂糖菓子を頬張った所為で聞き取りづらい声をかけた。

「あ、いたいた。なあ兄ちゃん、マールが呼んでるぜ。壊した舞

台の控え室をちゃんと直しとけつてさ」

ああ、もう。

なんで俺はこんな村に来ちゃったんだ。

倒れる際、非常に良い音を立てて後頭部を大地にぶつけたが、それが良い子守唄になった。

最後に見た空はまるで宝石のように美しく、ウルナ「ジスティアスの瞳のようだった。

+

からからと馬車がゆく。

緑の草原を、雲ひとつ無い蒼穹を、若鳥の群れを横目に見ながら。少女は右手で頼杖について窓の外を眺め、息をついた。ガリの聖女には逢うことが出来なかった。けれど、あの変な女の子とは少しだけ友達になれた気がする。ジスティアス家に来てから、初めて本音を他人に語った。

それでジスティアスは吹っ切れた。溜まっていた物を全部出したら、暗雲が風で吹き飛ばされるように、空が広がった。こんなにも広い青が、こんなにも近くにあったのだ。

「今まで通りで、別に構わないからな」

隣に座っていた青年が視線をこちらに寄越したようだった。ジスティアスは草原を眺望し続ける。狐の親子が遙か遠くで走っていた。「ちゃんと頑張る。領主になるために生まれたんだから、良い領主になって、領地を繁栄させる。あの豚には負けない。だから、お前は今まで通りで良い。変わるのは私の方だ」

青年が俯いた。まだ少し、調子が悪いようだった。昨日あれだけの状態から立ち直ったのだから、具合が良い方がおかしい。

ジスティアスは窓から視線を戻し、相手の目を見ながら、少し緊張した面持ちで続けた。

「いつかちゃんと誰かを愛せて、誰かに愛されるような、そんな人

になりたい。すぐには無理だろうけど、でも私、頑張るよ」

相手は何かを言おうと口を開き、そして僅かに眉を顰める。右手を抑え、言葉を喉の奥に押し込む。

ウルナは暫く沈黙を保った。やがて、とても言い辛そうに、先程よりも更に緊張で固くなった表情を相手に向け、「だから、その代わり、」乾いた小さな声で言う。

その続きを、アイスグラントは黙って待っていた。

「その代わり、お願いがあるんだ。あのさ、時々で良いから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2129b/>

微瞑むように 【第三話 少女貴族は野望を抱く】

2010年10月8日14時56分発行